

和 洋

得心の式禮婚結

婚式の作法第一冊

家庭図書刊行会編



\* 0054305000 \*

0054305-000

特225-320

和洋結婚礼式の心得

家庭図書刊行会・編

文江堂書店

昭和14

AIC

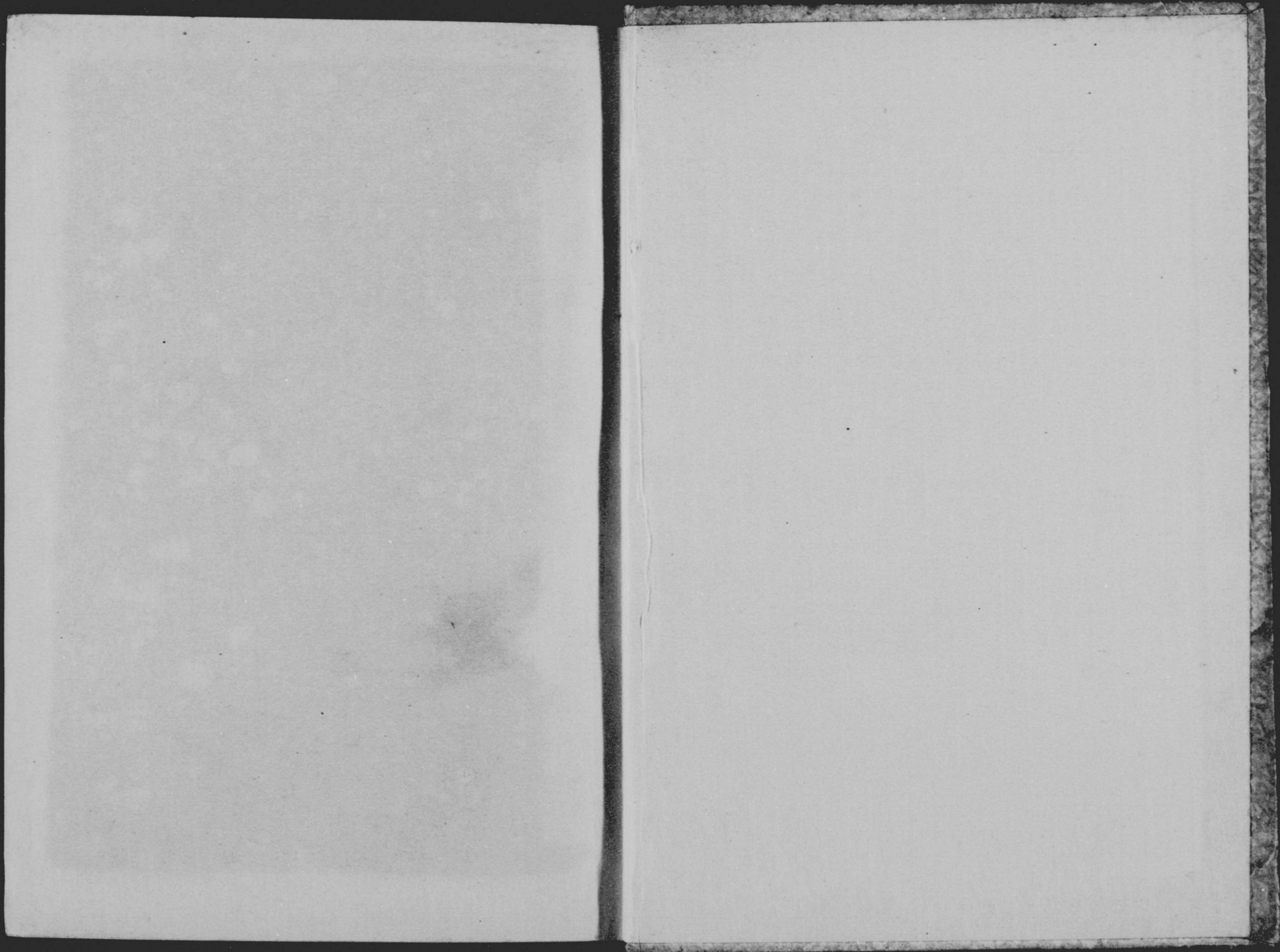
洋 和

# 得心の式禮婚結

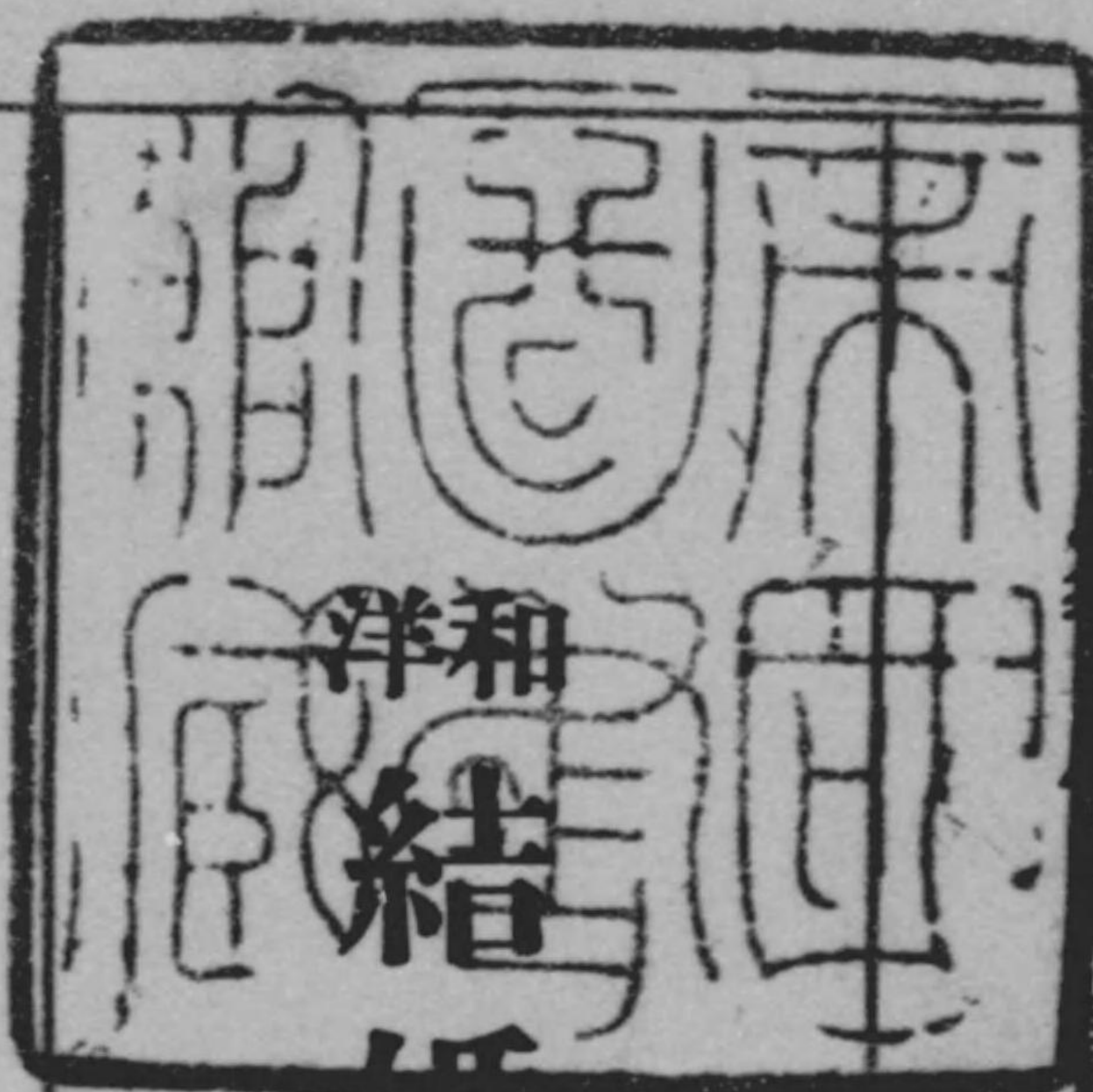
識常の法作般一附

編會行刊書圖庭家

行發堂江文京東



特225  
320



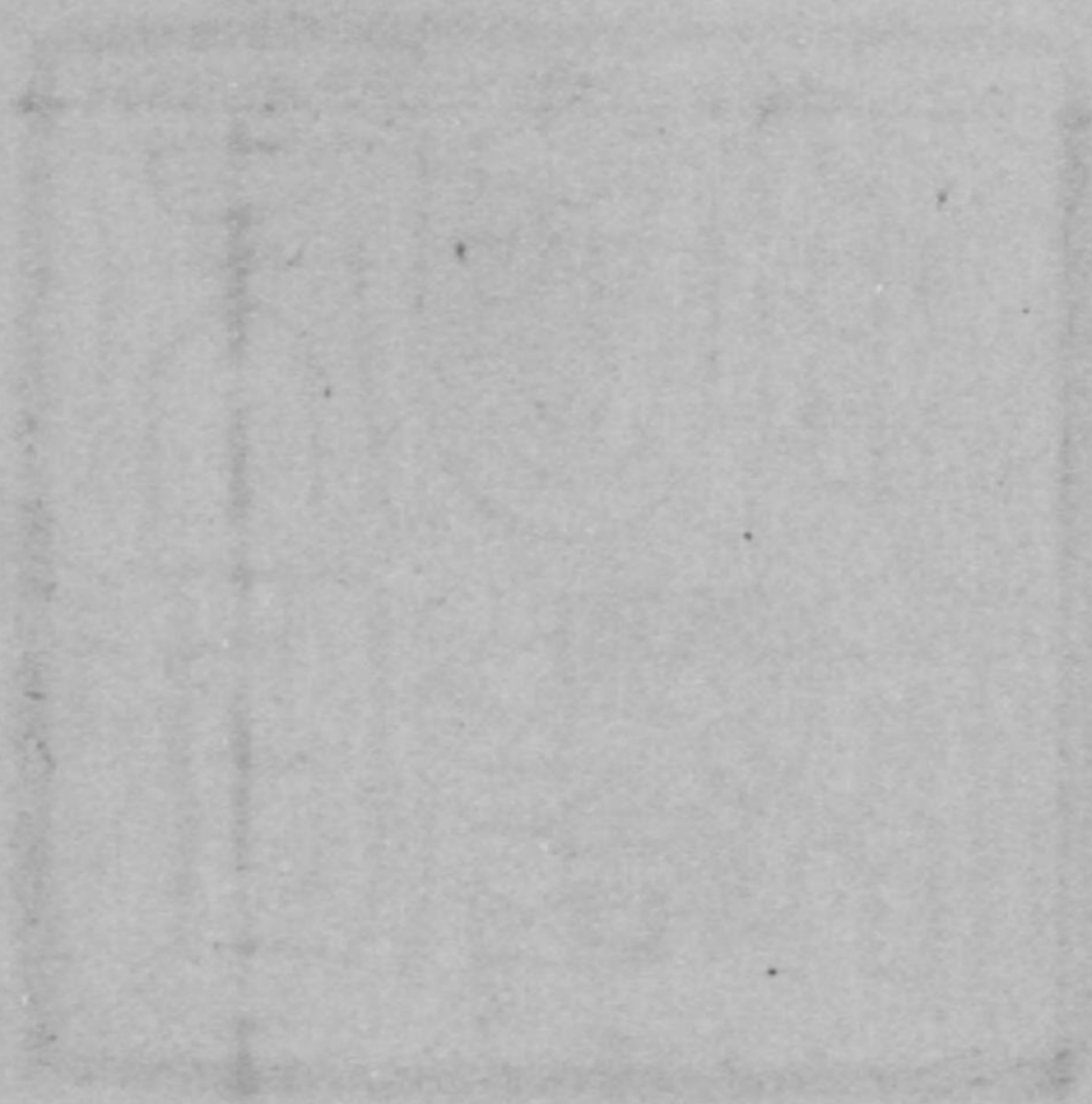
家庭圖書刊行會編

和洋結婚禮式の心得

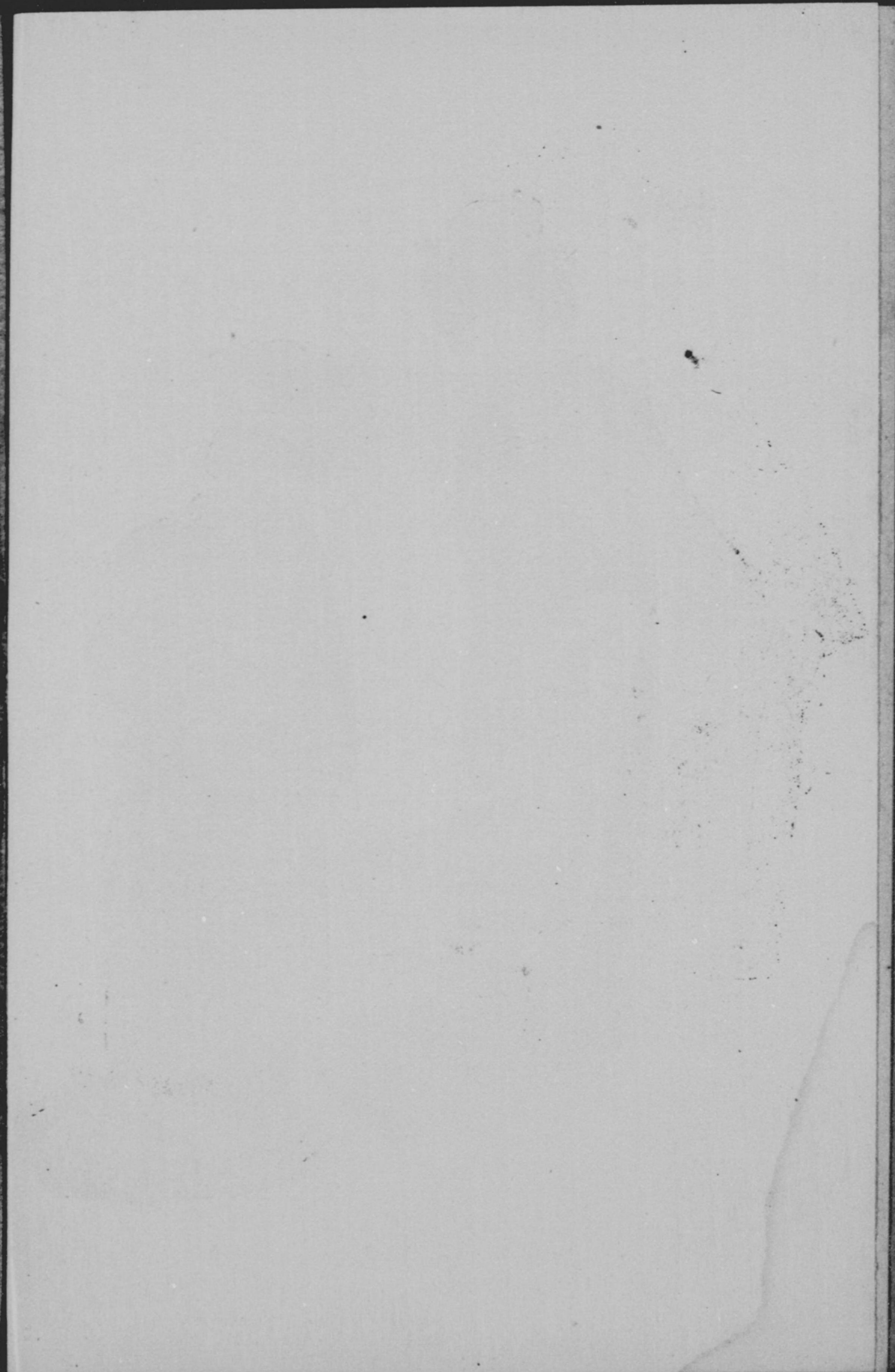
附一般作法の常識

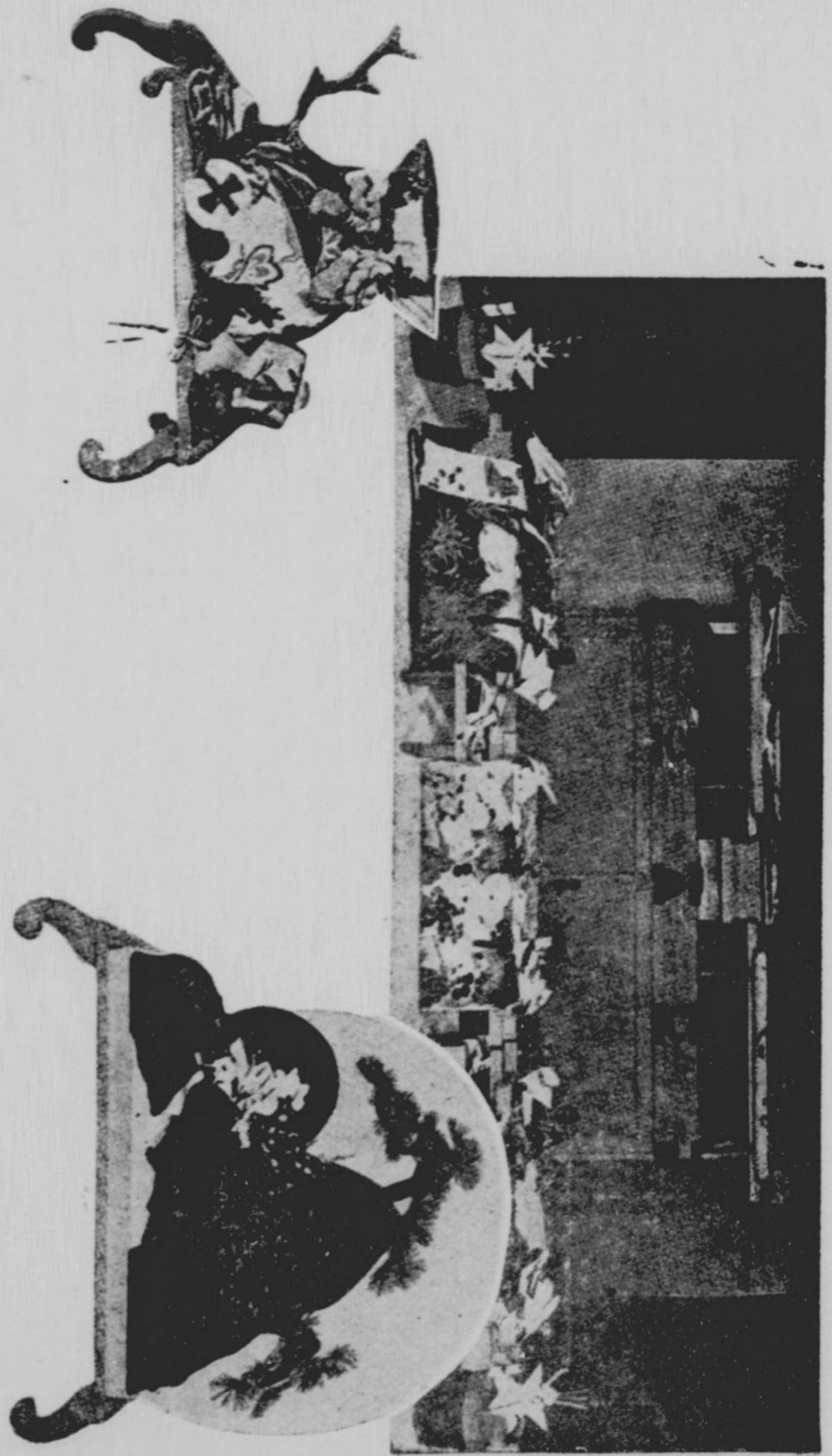


東京文江堂發行











## はしがき

結婚の本義は凡そ三つの要素から成立つものであります。第一は天則で、これは自然の原則として生物は結婚に依つて種族を繁殖せしむるの義務があり、本能がありますから、人類も此の本義に依つて種族の繁殖を営むために結婚をするのであります。第二は社會を構成して其の幸福を得、幸福を増進する爲めには結婚に依つて始めて其の目的に達するものであります。

第三は男女两性相互の愛情によるものであります。

結婚は以上三個の要素を包含して成立つものと言はねばなりません。併しながら往々にして、此の三個の本義が輕重權衡を得なかつたり、又は一個の要素のみに重きを置いて、他を顧みなかつたりするところから、所謂不合理の結婚が成立して、爲めに風俗を紊り、社會を亂り、個人の幸福を破壊するといふ結果は、時代により國家に依

り、屢々經驗せらるゝ所であります。この重大な問題は机上の論議を以て解決すべきものではありません。世の多くの人はどれだけの知識と、またどれだけの準備を以て結婚に臨まれるか、可也合理的な結婚をした夫婦でも、時に破壊の運命に到達することもあり、又不合理的な結婚でも、圓滿に一生を共白髪に送る人もあります。茲に於てか結婚は、人生の秘密境として奥深く鎖された殿堂とさへ言はれて居るのであります。

これを開く鍵！この殿堂の扉さへ開けられたなら、この秘密の世界に踏入つて、それこそ夫婦の眞味、或は又性の享樂をさへ味ひ盡すことが出来るのであります。

本書は若き人々の爲め、これから結婚せんとする人々の爲めにもと、女性の運命から説き起して男女の相性、方位、また母として如何なる良人を選ぶべきかなどを注意し、進んでは性の智識、婚禮式一切の心得及び結婚に就ての髪結び方、帯結び力等を細大漏らさず述べ盡したれば、所謂結婚の事なら何でも本書に問へと威張れるだ

けの至便の良書であります。

本書に依つて世の若き男女が、結婚についての痛手を負はぬ様せられたならば、世を益することの多大なるを思ひ、巻頭に附して一言序とした次第であります。

昭和十四年の秋

涼風訪れる丸窓の許にて

著者しるす

あなたは結婚の花環を永遠に色褪せさせない秘密が知りたいのか？——それは純な心、可憐な羞しがりの、而も快潤な、あらゆる人に悦びを與へる心、氣高く温かく、而も力ある眼だけが、その力をもつてゐるのだ（シルレル）  
 人に快い興奮を與へるもの、それは數々あらう、百千の花に飾られた五月の野、大空に輝くおほらかな太陽など。しかし、私はより以上の一つのものを知つてゐる。それは深い心に抱かれた、忠實な、高らかな、敬虔な、深い愛だ。（ガイベル）

## 目次

結婚前の心得と準備	一
理想の選擇法	四
血族關係——結婚の年齢——不婚——早婚——遅婚——年齢不釣合——體格體質	
性慾教育	一四
結婚準備としての性智識	一七
その夜の性行者	二三
床入りの心得	二九
婿へ婿を擇むに就ての秘訣	三三
健康長命の婿を發見する法	三八
婿を選ぶ方法	四〇
斯ういふ人物に託せ	四三
天才必ずしも良縁にあらず	四七
女性の運命	五三

運命と遺傳及び境遇……………三  
 運命と迷信……………五

夫婦和合の秘訣と相性……………六〇

九星の相性法……………七〇

縁談の占ひ……………七一

十干天稟の性質の相性の配合……………七五

六曜星の説明……………八二

十二直の説明……………八二

本命的殺の早繰……………八三

吉日の説明……………八五

新らしい占ひ方……………八六

結婚してよい年齢と悪い年齢……………八七

生れ月日で相性を知る……………九〇

十二宮に依る運氣……………九二

媒酌人と云ふものは……………九六

結婚式に就ての心得……………九八

見合のこと……………九八

結納……………一〇二

結納の品……………一〇三

結納目録認め方……………一〇八

親類書認め方……………一一一

結納を受けるに就て……………一一二

結納使者の心得……………一一三

贈り方と受け方……………一一四

使者の饗應と挨拶……………一一六

結納の内披露……………一一八

花嫁の調度品……………一一九

荷物送り……………一二〇

花婿の服装……………一二三

花嫁の服装……………一二四

式日婿嫁方の準備……………一二四

式に用ひる品々……………一二五

鳥臺——押臺——手掛——燈鳥置盤——鉢子——提子——瓶子——燭臺	.....	二九
式場の床飾	.....	三〇
三献の肴	.....	三一
膳の進め方	.....	三二
長熨斗の薦め方	.....	三三
膳部のこと	.....	三四
白無垢と庭火	.....	三五
花嫁迎へのこと	.....	三六
待女郎の心得	.....	三七
門出の盃	.....	三八
嫁入の順序	.....	三九
花嫁到着時の心得	.....	四〇
<b>結婚式</b> .....	.....	四三
身姑と嫁との盃	.....	四四
親類盃の仕方	.....	四五
色直しの事	.....	四七
總客の盃事	.....	四九
	.....	五〇

閨盃の式	.....	一五
<b>圖房の構造に就て</b> .....	.....	一五六
房の廣狹	.....	一五六
燈火	.....	一五八
溫度	.....	一五九
具備すべき藥品	.....	一六〇
結婚披露	.....	一六〇
日本式の披露宴——西洋式の披露宴——結婚披露通知狀	.....	一六四
神前の結婚式	.....	一七〇
教會の結婚式	.....	一七〇
<b>結婚式後の心得</b> .....	.....	一七一
婚禮の翌日	.....	一七一
里歸り	.....	一七二
里開き	.....	一七三
婿入りの式	.....	一七四
門見せの禮	.....	一七六

新婚旅行に就て……………一七六  
 婚禮に用ひる生花の善悪……………一八三  
 婚禮の忌事……………一八四  
 婚禮の贈答品に就て……………一八五

**家庭の人となつてから……………一八七**

良人に飽かれぬ要心……………一八七  
 學校出の嫁は何故嫌はれるか……………一九二  
 可愛がられる嫁と頼母しく思はれる嫁……………一九五  
 良人の機嫌を良くする工夫……………一九八

**縁談に関する傳説……………二〇〇**

縁切りの神様と迷信——縁談に関する縁起と占ひ

**帯の結び方……………二二三**

島田にうつる帯の結び方——令嬢向の結び方——洋髪に似合ふ結び方——  
 夏帯の結び方——短い帯で結ぶお太鼓——八千代結び——彌生結び……………二三五

島田まげ——まる鬘——束髪——春向の髪——夏向の髪——秋向の髪——  
 冬向の髪——若奥様向

**髪の衛生……………二三七**

**結婚披露の挨拶……………二四二**

結婚披露の挨拶(父より)——結婚披露の宴に招かれて(友より)——同(來賓總代より)  
 披露宴の末席から(主人側の謝辭)

**諸届書式……………二四六**

養子縁組届……………二四六  
 婚姻届……………二四七  
 入夫婚姻届……………二四九  
 轉籍届……………二五一  
 分家届……………二五二  
 住所(居所)寄留届……………二五四  
 復歸届……………二五五  
 退去届……………二五六

印鑑届……………二五七  
委任状……………二六六

目次終

和洋 結婚禮式の心得

家庭圖書刊行會編

結婚前の心得と準備

結婚といふ事は男女共に一世一代の事業でありますから、相當の覺悟——それは結婚前と結婚後の覺悟とがある——併し結婚前の覺悟は、結婚後の覺悟になるのであります。何故ならば、浮調子では結婚は出来るものではありません。結婚と云ふ事は、男と女とが單に結合すると云ふ簡單な問題ではないからであります。

この結合に依つて、初めて自分といふものを子孫と云ふ名の下に、延長する事になるのであります。自分といふものゝ壽命は、一般に五十年とされて居りますが、子孫

と云ふものゝ名儀に依つて、自分と云ふものが永久にこの社會に刻みつけられるもの  
です。それだけの覺悟をしなければなりません。

若し同志の行き當りばつたりで野合するのとは違つて、正式の夫婦と云ふことは  
これを國家が公認するのでありますから、犬や猫のやうに、氣に入つたら喰付いた、  
嫌ひになつたから離れた——と云ふ様に馬鹿氣たことは出来るものではありません。

近頃の新しい者の言ふことは、「男女の關係は自由でなくては可けない」と。これ  
は單に自分と云ふ、野獸本能の満足といふ事柄のみを中心として割出された議論であ  
つて、苟くも文明とか文化だとか言つて、萬物の靈長を氣取る人間の言ふべき言葉で  
はありません。尤も女が男と同様に、妊娠と云ふものがないならば、或は前者のやう  
な議論も成立しないとは言へませんが、女は一度男に接すれば、十中の八九までは（賣  
淫等の婦人は別）妊娠といふ大厄が生じます。妊娠の次に來るものは分娩であります  
女と云ふものが生存原則として、男子の寄生蟲であるとするならば、女は男から離れ

て、自分及び分娩後の嬰兒を何によつて養ふか、と云ふ事になります。或は分娩の責  
任者として、男子が子供を引取つたとして見ますと、男子が子供を引取つて養育の出  
來るものでないことは、生れた嬰兒そのものがよく心得てゐます。父親に従はずして  
母親の懷をねらふことは、母親に乳といふ養育機關があるからであります。男子にも  
乳といふ養育機關が女子と同様にあるとすれば、それは嬰兒はどちらにでも附くであ  
りませう。それは自然の動物生活の與へられてある天賦がそれを許してゐないのであ  
ります。

既に天賦が許してゐない事柄を、人間が自己本位の理屈をくつゝけて論じて見たと  
て、それは半文の値打もないではありませんか。結局は子供は母親に依つて育てられ  
なければならぬものであります。その母親及び嬰兒の發育生存を脅すやうな男女關係  
即ち嫌になつたら分れやうといふ事は、母親は別問題としましても、嬰兒生存を無視  
してゐます。而もその嬰兒なるものは、自分に關係はないのか——と云ふに決して然



うではありません。その母親となつた女と、自分との共同の延長物として現はれたものが即ち子供である以上は、子供の發育といふことに對する責任は、當然男は負ふべきものであらねばなりません。故に犬や猫と同一のやうに、氣に入つた時だけは夫婦であり、一度厭になつたら別れるといふやうな、得手勝手の結婚は斷じて許すべからざるものであります。その意味に於て結婚は重大なであります。従つて結婚前の覺悟、準備智識、結婚後の覺悟を知らねばならぬことになる。然らばその結婚前の覺悟たるや、何ぞ——。

## 理想の選擇法

結婚の標準として採るべきものは、次の如きものであります。第一血族關係、第二遺傳、第三家柄、第四尊親についての標準(體格、體質、品性)第五當人についての標準(年齢、體格體質、相互體質關係、教育、品性、容貌)等であります。

## 血族關係

民法には「直系血族又ハ三等親内ノ傍系血族ノ間ニ方テハ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス但養子ト養方ノ傍系血族トノ間ハ此限ニアラス」とあり、又「左ニ掲ケタル者ハ之ヲ親族トス 一、六等親内ノ血族 二、配偶者 三、三等親内ノ姻族」とあります。民法の血族又は三等親内の傍系血族の間の婚姻を禁じてゐるのは、所謂血の續いたところの程度近い血族の間の婚姻を戒めたのであります。養子と養方の傍系血族は無論血の續くと云ふのでありませんから是は取除いてあります。民法の本係は固より醫學的の理由から來たもので、血族間の結婚は現今の學理に於て固より有害なる結婚であると云ふことが認められて、始めて斯様な法律が日本及び他の文明國にも定められてあります。

併しこの血族結婚に依つて種族が滅亡するといふことは恐らくはありますまいが、人類の向上或は發展を圖るに、彼此相對照して始めて善惡可否を決すべきもので、血

族結婚が悪しく、異族結婚が善いと云ふのも全く比較的の論であります。本来から云へば、總て善悪は固より比較的のものであります。此の場合に於ても血族結婚と異族結婚とを比較したならば、血族結婚が害が多くして異族結婚は害が少ない、従つて利益の多いと云ふことが最早争ふ餘地がないことになります。

血族結婚は何故悪いかと云ひますに、現今の學說によれば、血族結婚の爲めに悪質の遺傳を多からしむると云ふのが根據であります。同じ性質の血族が互ひに結婚を重ねると云ふと、その悪質が層一層濃厚になつて、それが爲めに不完全なる生理的及び病理的現象が漸次増加するものであります。例へば精神病系統の血族又は神経病系統の血族等が、血族間にのみ結婚を重ねると、次第に性癖或は病的、性質が其の強さを増して遂には顯著なる所の精神病、或は神経病を續發するに至るのであります。昔穢多といふ社會は、他の社會との交通を拒絶せられた爲めに、彼等の社會に於てのみ交通して居つたが爲めに、その狭い區域に於て結婚するところから厭ふべき病名を冠せ

られるやうになつたのであります。

尙ほ附加へて申しますと、盲生には從兄弟間の産兒が少くして啞生に多く、此の例に見ましても近親の結婚者が不具者を産出することが知ることが出来るのであります。

### 結婚の年齢

年齢は民法に定められてありますが、これを生理上から申しますと、男女の結婚は其の體質の發育完全したる時期、尙ほ切實に云へば男女生殖器の完全したる時期は即ち結婚を許すべき年齢と見て然るべきものであります。男女生殖器の成熟は風土に依り一様でありませぬ。即ち熱帯地方は成熟の期が早く、寒帯の地方は之に反して遅く温帯地方は其の半ばに居るものであります。

この年齢關係に病弊があります。第一は不婚即ち獨身生活、第二は早婚、第三は遅婚、第四は年齢不釣合の結婚等であります。

不婚

生理上人體に有益であるか不利益であるかは多少論があります。吾々の身體は素より結婚し又子女を生むべき生理上の約束があります。然るに獨身を繼續すれば生理上往々にして異常を來し、神經及び精神の異狀、更に之より諸臓器の疾病を醸すに至ります。

### 早婚

男女の年齢が稍長すれば、父兄は其の不品行を恐れ、或は家政維持等の關係から兎角早婚を實行する風があります。この早婚の弊害はどうかと申しますと、第一體力の發達が完全しない、此の際に結婚すれば體質の發達を害して、將來結婚同志の體力に大影響を來し、又社會上から云つても、結婚者が結婚の準備教育、生産力等の完全ならぬ者が結婚をして一家を構成するに至つては、前途發展の基礎を破壊するものであつて、何れにしても早婚は決して歡ぶべきものではありません。けれども此の結婚の時期なるものは、國風或は社會の進歩等に依つて慎重に取極めませんと、早婚の害

は固よりであります。遅婚の爲めに亦種々の害を醸す虞れがあります。

### 遅婚

結婚は男女共に適當の年齢に於て實行すべきは無論のことです。然るに若し其の時期を後れて結婚するに於ては、其の害は不婚と同一なものであります。唯不婚は其の害が終身に涉ると、遅婚は其の程度が稍輕いとの差があるのみであります。尙且つ遅婚の害は動もすれば品行を紊り、花柳病を招き、不自然の漏慾其他之より種々の身神上の害を醸すことがあります。若し適當の年齢に於て結婚したものが途中に於て其の對手を失つて、更に再婚を求むるが如きは、是も遅婚には相違ありません。けれども、止むを得ぬ事態として實行されて居ます。併しながら此の場合に於ては、別に遅婚の害肉體精神上に見るべき害がある筈のものでなく、寧ろ遅婚と名付くる範圍の外に置いて可なるものであります。

### 年齢不適合

これは男女両性の年齢が甚しく懸隔してゐるのを云ふのであります。結婚年齢は女子十八歳以上男子二十歳以上を適齡としますけれども、教育其の他の關係から必ずしも男女四五歳以内の懸隔に限る譯にはゆきません。多くの場合に於て、それ以上の懸隔あるのが常であります。けれども甚しき懸隔があつても大抵十歳乃至十五歳位を限りとして、其の以上懸隔のあるのは、それは因より不適當であります。甚だしきに至つては男子の子にも等しき婦人、更に甚だしきは其の孫にも等しきものと結婚するに至つては、その生理上絶対に不合理であるのみならず、家庭の結構、社會の風紀等の方面から見ても不適當と云はなければなりません。

不釣合の結婚の生理上の害と云ふものは、人體は長幼に依つて素より其の精力に強弱盛衰があります。然るに甚だしく年齢の懸隔した者は、精力固より一致を缺くところから其の一方、或は相互が其の悪影響を蒙らなければなりません。更に具體的に言ひますと、一方は生殖器の旺盛の者であり、一方は未熟若くは最早沈衰の時期である

者とするれば夫婦たる所の本旨に背く状態に陥るばかりでなしに、爲めに疾病を惹起し或は精神上的の異状を惹起さねばならぬこととなります。更に又夫婦間の愛情和合と云ふものは、適當な年齢の者が相合して始めて得られる所の幸福であるのに、年齢が非常の懸隔をしてゐる夫婦間には、決して眞正の愛情と云ふものを見ることが出来ませぬ。のみならず品性下劣又は無教育の者に至つては、これが爲めに往々節操を破り、家庭の平和を破壊するに至るのは決して無いことを期し難いのであります。

### 體格體質

結婚者當人の體格及び體質は要件中の最要件であります。これは容貌の醜美とは全然其の意味を異にします。一口に之を言へば、青年の體格は先づ堅實でなければなりません。姿勢の美と云ふものは、多く體格の美に伴ふもので、姿勢の善美なるものは體格の善美なる一つの表徴であります。例へば脊柱の側彎があれば姿勢が端正でなく又脊柱の前屈があれば其の人は反り身になることが出来ずして、兎角屈んでゐる所の

姿勢をとるのであります。それで體格の美は姿勢の正しき者でなければなりません。次は筋肉の發育即ち肉付きの適當なる者は、また體格の善美の二表徴であります。甚だしく肥満し甚しく羸瘦する者は固より善美なる體格ではありません。衣服を裝うた者に於て一見して其の肉付きを知ると云ふことは偶々困難なことでありませぬ。何故なれば細面の人は一見瘦せて居るやうで、身體の肥満してゐるにも拘らず、其の肥満が見えないことになります。其の反對に顔の圓形の者は、其の身體は割合に細つて居ても、一見細く見えないことがあります。精密にこれを調査しますと固より明白でありますけれども、一見して之を知るのは日本の座居に於て、其の膝の折り屈げたところの膝の高さを知るのが、人の肥瘦を知る最も簡單なる一つの標準であります。體質に就て申しますと、偉大の人が必ずしも健全でなく、矮小の者必ずしも病身ではありません。體質と云ふものは、つまり身體總ての組織器臟の健全なるや否やを云ふのであります。體質良否の重なる表徴は、所謂營養の良否如何にあります。如何に

肥満して居る人でも、營養の不良なものは體質不良の徴候であります。割合に肉付きが悪くとも營養の善良な者であつたならば、其の人は強壯な一つの表徴と言つて宜しい。世間には人の色の白いのを貴ぶ風があります。色の白いのは美に相違なく、また決して悪い徴候ではありませんが、單に白いばかりが貴ぶべきではありません。黒白は兎も角二段の話であつて、第一に貴ぶべきものは、實に營養の佳良にあります。營養の外説に現はるゝ表徴は、即ち血色又は光澤の如何にあります。この光澤の美惡は詰り營養の美惡の徴候で、光澤の善良なる者でなければ決して健康な人と云ふことは出来ません。例へば草木の如きものであつても、其の色と其の形狀の外に光澤といふものがあります。併し營養が不十分であるか、或は日蔭にあつて能く日光に當らない草木は、相當の形は表はしてゐても、活々した光澤は自ら缺けて居ります。人間も全くそれと同じで、營養が善美であつて、體質の善良なる人は必ず其の肥つてゐる瘦せてゐると云ふ關係以外に、十分活々した光澤を有たなければなりません。この血色又

は光澤なるものは、營養善美の發現であることは血行循環の活潑なる徴候であり、尙且つ精神状態の穩健なる一つの徴候であります。人の容貌を相する場合に此の光澤なるものは十分注意を要します。この點に於ては昔の骨相家が多少實地に研究されたものであらうと思ひますが、結局選擇の場合、人を相する時分に於て、衛生上の點からこの光澤なるものに十分の注意を拂はなければなりません。以上で結婚論の大體を盡しましたから、これから性の智識に就て述べることに致しませう。

## 性慾教育

新郎新婦とが結婚の夜を迎へた時には、その懐く觀念の上に於て、兩者の間に雲泥の差のあることを先づ何物よりも前に知つて置かねばなりません。世に謂ふお轉婆娘放蕩息子といふ、それ等男女にとつては、實際結婚の夜も問題とはなりません。何故

なれば、この種の男女は過去のすべての夜が結婚の夜であるからであります。結婚の夜が問題になるのは、女に觸れた經驗のない男と、所謂箱入娘と云はれる處女が結婚した時の夜であります。よしや童貞とゆかぬまでも、賣笑婦以外の女に觸れた經驗のない男も然うであります。

併し既に男と名の付く多くの者には、結婚の夜に於て何を爲すべきものか位の事は知つてゐます。即ち結婚の夜を迎へる男の胸中には、或る一つの目的が劃然と畫かれてゐる。これと反對に處女には、結婚の當夜その婚姻の儀式の濟むまでも、その配偶者たる新郎にある如き明確なる目的が、頭の中へ浮んで來ぬのであります。たゞどんな事が起るのかとのみ疑惑と羞耻と、そして空虚になつてゐる體を以て、結婚の夜を迎ふるのであります。雨か風か——そんな出來事は新婦には豫知することが不可能であります。

相當年増になつた既婚婦人同志の間に於てこそ、随分立入つた話を平氣でして居る

が、いたいいけな無垢の處女が、どうして此の種の話が、假令母親にさへ打明けて話すことが出来ませう。こんな事から純良な家庭に育つた處女の内には、結婚の夜に起る事件を、たゞ新郎と床を共にするに過ぎぬくらゐにしか思つて居らぬ者が、決して少くないのであります。

昔は嫁入り道具の中へ、春書の類を忍ばせて持たせてやつたものであります。これは口で教へ難き問題を、その書によつて教へるといふ、その時代に於ける性教育だつた譯であります。これは其の方法を誤つたものであると云はねばなりません。現今でもその誤つた方法が、尙ほ多くの家庭に於て採用されてゐるといふことであります。

この性の智識、性の教育といふものは非常に廣汎なものであります。その一部を知り一部を教へるだけでは何の足しにもならず、寧ろ益なくして害のみ多きものとなります。故に淺くとも全般に互つて教へなければならぬものであります。

### 結婚準備としての性智識

正しい結婚生活に入らうとする男女の、第一に知らねばならぬことは、まづ男と女は生理的にも心理的にも、いろいろ違つたものを持つてゐるといふことであります。性慾に於ても、そのあることは男にも女にもあるので、その點はその發現の順序や様相に於ては大に違ふ點があるので、従つて結婚そのものに就ての考へも男女によつて多少相違してゐる場合が多いのであります。勿論これは年齢によつても、乃至そのものゝ受けた教育などによつても種々に相違して居ると考へなければならぬのであります。先づ大體に於て婦人は一般にロマンチックな夢を多量にもつてゐて、この點では婦人の方が男子よりも、より精神的であると見られます。従つてその夫に對して求めてゐるものは字義通りの愛撫なのでありますから、彼女にして若しも此の夢を破られるやうな事があれば、それは直に大きな驚きとなり、不安となり、また憎みとな

るやうなことが多いので、これは必ずしも前に挙げたやうな悲劇の發生とはならないまでも、その後の夫婦生活に甚だ面白くない結果を齎らすことが屢々あるのであります。

戀愛の自由や、結婚の自由を壓迫する道德や風習や制度が日本には今以て殘存してゐます。親の認める結婚のみが唯一の結婚で、その他一切の男女關係は一樣に不義であり、徳川時代のやうな残酷な罰はありませんけれども、所謂不義を懲すべき制度は嚴然と存在してゐます。尤も息子や娘の結婚に於て、その戀愛を認める家庭も漸次増加して來ましたが矢張り大多數の家庭ではそれが許されてゐません。かゝる家庭の父母に向つて、結婚當夜に於ける男女の心得を説く如きは、極めて心細い事であり、新郎新婦が儀式的な初夜の行動に於ては、寧ろ不成功に終る方がよいと考へます。それは何故と申しますと、結婚といふ儀式に落着を失はれ、アルコール等の微醉に加ふるに好奇的な切望よりの試みが、行動の粗暴を來し、癒えぬ不幸の芽生を最初より

求むることは、最も悲しいことであらねばなりません。のみならず若し、新郎たる男が、賣笑婦に初めて接せし際に得た經驗を先入主として、新婦に接する如き事とならば、自分としても非常なる不満足不愉快を感じ、新婦は愛に乏しい冷淡なものであると誤解したり、或は新婦を不感性の女であると誤判したりするに至る憂ひがあるのみならず、妻となつて其の女の將來に於ける精神状態や生理状態に悪影響を及ぼすに至る危険さへあります。

男は如何に賣笑婦に接する經驗のない者でも、既に結婚と稱せらるゝ形式を踏まうとする意思のうちに或る歴然たる要求をし、この要求に促されて結婚するものでありますから、結婚の夜を迎へても決して、しどろもどろになる如きことなく、簡單明瞭にこの要求を充たさうとしますが、處女の總ては、結婚に依つて充たされねばならぬと痛切に感ずる如き要求を胸中に藏して居らぬのであります。假りに或る要求があつたとしましても、それは精神的のものであります。爲めに結婚の夜に於ける新郎新婦



は、恰も何物かを熱心に買はうとするものと、假令それを所持して居ても、毫も之を賣らうとする意志のない者との出會に彷彿たる如き觀を往々にして呈してゐます。

對手方が手放すまいとしてゐるのを、手放さして買はうとするには、短氣が何より禁物であります。根氣よく、優しく持ちかけて、先方が悦んで手放す氣になれるまでに手順を運んでゆかねばなりません。結婚の夜を迎ふる新郎に要する心掛けも亦矢張りそれであります。平たく言へば、男は生理的要求に促されて結婚しますが、處女は生理的要求に餘儀なくされて結婚するものでなく、兩者の間には結婚の夜に於て、そこに著しい逕庭があるのですから、新郎は先づ何より先に、新婦をしてこの生理的要求を起すに至らしむるやう、適當の手段方法を講ずべきであります。然らずして一氣に己が要求のみ充たさうとするに急なれば、その新妻となつた女に見下げられ、如何に肉慾の結塊たるに過ぎぬ猛獸たるかの如く蔑視され、一生涯頭が上らなくなりその妻をして嬌婦たるに至らしむる惧れなきにしもあらずであります。殊に相思戀愛

の間でもない男女の結婚した場合に於て、新郎たるものは、この點に一層の注意を拂ふべきであります。

斯くの如く處女の總ては皆、不安と危懼との間に結婚の夜を迎へねばなりません。のですから、これが親たるものは、微細に亘つてその夜を興ふることを憚るにしましても、苟も人妻となるものは、單に精神的や勞役的に犠牲を其の良人の爲めに拂ふのみならず、肉體的にも犠牲を拂はねばならぬものであることを、結婚の夜に先立ち懇々と能く説き教へ置くべきであります。即ち如何に己れに慾望のない事でも、それが若し良人の欲する處であり、夫の欣快とする處であるならば、自己を犠牲にして良人の命に従ふ從順の心掛けがなければならぬことを、飽まで其の娘に心得させておかねばならぬのであります。新婦にこの犠牲心あり、新郎に氣永く待つ根氣さへあれば結婚の夜は必ずや何等の悪影響を將來に齎さずして、至極都合よく経過し、結局圓滿なる取引が成立するやうになります。これが取りも直さず結婚準備としての性の智識

であります。

## その夜の性行爲

結婚の儀式に列なる新婦は、屠所の羊の如く唯恐怖にあることは實際事實であります。斯るものに強制的に望むことは弱者の手を捻ぢあぐるに等しい。而して若し新婦が直に受胎せるとき、それが假令初孫として珍重し歓迎せられやうとも、それは餘りに新婦に酷であり、子女を損ふものであります。

その夜の性的關係が如何に結ばれやうとも、そこに幸不幸を定むることは出来ません。併しながら結婚後夫婦が性的關係の誤つてゐたこと、性的生活の始まつたことを記さねばなりません。初婚の夜想像外なる變態の性行爲の行はれることも亦多いと云はれます。男子が粗暴な行動に出で、其爲め婦人が精神的の感動又は肉體的の損害を蒙ることは、既に一般人に熟知せらるゝ不幸な出来事であります。暴力は甚しき程

度まで行はるゝものらしく、その結果は極度の損障であつて、精神的に與ふる悪影響は大なるものがあります。それ等の危険を避くるためには、一通りの解剖的知識が要ると思ひます。

生殖器の異常と云ふことは、勿論重大な問題であらねばなりません。例へば無膣、處女膜の肥厚などは是非とも醫療を乞ふ必要があります。少年時代の手淫の結果のインポテンツは、初婚の夜始めて發見せらるゝことが多いのであります。併しこれは密かに苦悶するを避けて醫療を乞ふべきであります。結婚は必ずしも月經其の他の障害を避くる要はないと思ひます。一般の人は月經を避けて月經後を良しとして居りますが、これはそれ程に避ける要はありません。結婚の初夜は儀式的形式の性行動が行はれますけれども、故意に其の完全ならんことを求め、受胎の好時機を選ぶことは、前述の理由よりしても賛成は出来ぬのであります。世の親にして斯る月經等の些細な事まで考慮に入れて婚姻を定むるものが幾人ありませうか。併しながら斯る周到な注

意も若き夫婦の幸福を亂さざらん心遣ひならば、賛成を惜みません。要するに結婚は人生の大事であります夫婦結合の一步であり、將來の幸福の基を開くものでありますその大事を、唯一片の儀式の形式が亂すとせば、重大な問題であります。

床入りの式は一種の略奪婚の形式であります。夫婦の契を結ぶものでなくて、處女の貞操を略奪して自己の隷屬物とする形式であります。男子の多くは茲に期待を有し欲望を有し、満足を得んとして居ります。

夫婦は性的行爲を営み、子孫の繁榮を計ることは事實であります。併し夫婦は管にかゝる肉體的關係のみに存在してゐるものではありません。若しそれのみであるならば、それこそ禽獸に等しく、人としての價値はないのであります。茲に於てか愛の結婚が望ましくなります。性的征服——初婚に當り全く野獸的に、威壓的に妻に迫り、暴行を敢てする——に依つて妻を得ることは好みません。双方の打ち解けた意嚮に任せて、性的にも契を重ぬれば足りることでもあります。といふ心持を結婚に望む人々は

持たれたいと思ふのであります。

ところが始めてその操を破る——と云へば語弊があるかも知れませんが、始めて性交を行ふ時に、花嫁がどういふ心理に襲はれるかは極めて興味あることであると共に男子にとつても女子にとつても、經驗のない者は是非とも心掛けて置かねばならぬこととであります。性に關して全然無智な處女、つまり全くおぼこい娘は、常人から見れば全く滑稽なほど飛んでもない思ひ違ひをしてゐます。その一例を擧げて見ますと、性交部を臍であると思つてゐる者さへあります。尤もこんな例は年齢の若い者に限りますが、性慾を知り性交部を知つてゐる者でも、性交は一夜中を要するものだから、一回の性交によつて必ず一回妊娠するものだから考へてゐる者は、純潔な無智な處女の中には澤山居るのであります。ヒルスは「都會に住む男子は二十五歳になれば五十人の女子を知るが、女子は漸く眞の性的興奮を知るやうになるのみである」と言ひました。これは極端な説でありますが、處女は全く右に近いやうなものでありますから

男子は決して自分の如く對手も性的興奮を起してゐるものだと言ひに斷じて、輕々な行爲をしてはなりません。新郎が處女の心理に全く無理解であつたり、その他の事から新婦が驚愕や羞耻のあまり床を飛び出したり、自殺を企てたりした例さへ往々あるのであります。性慾は汚れたものとのみ教へられた處女に於ては、戀愛も理解もない男に迫られて、その肉體を求められ、男はかくの如き卑しきものゝみを求める野獸であると言ふ感じを抱くものであります。そして彼女は結婚と云ふものに對して、非常な幻滅を感じ、自分が結婚したことを深く後悔し非觀し厭世する、彼女は結婚に於て愛を求めてゐたのです。然るに與へられたものは彼女が日頃醜いと思つてゐる性慾のみでありました。女は愛の生活を求め、男は性交を求めてゐました。何といふ皮肉であります。而も斯ることは多くの結婚に於て見られる事實であります。瘦せ衰へ何となく憂はしげな浮かぬ顔の傷々しい姿の花嫁を吾々は如何に多く見ることとせうか斯くの如き花嫁も後には眞に給合を得る日もありませんか。兎も角結婚が最初に於て

斯く不吉な豫兆めいたものを見せると云ふことは忌はしい事であります。故に女子に對して生涯の心理的生理的大轉機である最初の性交に於ては、對手を驚かすことなくお互ひの自然的要求から行はれなければなりません。一般の處女に於ては、羞耻は可也甚だしい、況して性的な事物に接した時には、それが一層甚だしい。殊に純潔な處女が戰々競々として嫁入つた場合など、羞耻と恐怖で一杯になつてゐるのでありますから、それを更に性的に冒すやうな場合は、實に身も世もあらぬ心持になることは言ふ迄もありません。これはくれぐれも注意を要することとあります。嫁に來た場合などは、周圍は皆知らぬ人達ばかりであります。眞に自分の味方になつてくれるか何うか分りません。要心しなければならぬ人達であります。その上更に唯一の自分の味方であるべき夫が、自分の理解してゐない、自分を理解してくれて居ない人だつた場合など、その花嫁の心理は全く心細い寂しい便りないものであります。剩へ甚しい羞耻が更に困難を増大ならしめます。故に性的

行爲の開始は決して焦ることなく、妻が夫に對して此の人は優しい人だ、愛情の深い人だといふ慕はしい氣持、人間としてこの快よい印象を妻に與へて、妻が夫の傍で安心して寛げるやうになつてから始められなくてはなりません。性的行爲をよく多くの人達は、「妻のつとめ」とか言ひますが、斯様に良人との唯一の愛のクライマックスが義務視せられ、辛い務めの如く見られるの時、結婚當時に於てその良人が無法にも性交を強い、それを良人の當然の權利でもあるかの如く犯して了ふところから出發します。斯様な妻等は一生眞の満足を見出し得ず、辛いものだと思ひながら其「妻のつとめ」なるものを仕事のやうに思つて厭々繼續します。それで其の人達は本當の満足を見出す機會を失はしめられるのであります。かゝる妻はかの苦海にゐる娼妓と何等の變りもありません、又その夫も、妻は自分に身體こそ任せてをれ、何等の愛情も快感もなく、厭々つきあひをしてゐるのでありますから、その性交は自瀆と何等の變りもありません。實に無味乾燥殺風景この上もないものであります。そこには夫婦の神

聖な交りがどうして有り得ませう。荒涼たる劣慾の沙漠があるのみです。故に床入りの場合に於ては、新郎は出来るだけ自分の逸る心を抑制し、寧ろ臆病すぎる程あらゆる行爲を慎まなくてはなりません。努めて愛情深く妻をいたはり、綿密な配慮を用ひそして快い許諾を得ることが肝要なのであります。

### 床入りの心得

夫婦の愛は何時までも肉が支配するものでなくて、精神的のものに變らなければなりません。併しながら先づ最初の肉の愛に入る關門に於て、屢々飛んでもない悲劇が起ります。花柳界に於ては雛妓が一本になる場合には、老人の客に依頼して水揚げを行ふて貰ふといふ話でありますが、これは全く若き男性の狂暴な性行爲が、多くの悲劇を作ることを、經驗上から知つての事であらうと思はれます。ニウゲンパウエルは最初の性交に於ける悲劇の例を澤山示して居ますが、その一つは初めての場合に局部

に負傷することであります。それは全く裂傷並びに擦過傷であつて、亂暴な性的行爲、性交の位置の變則、性的器關の種々な相違、女子生殖器の疾病並びに變質畸形等に原因します。新婚の夜は實際に於て屢々で Violation があるとフロイドは言ひこれから多くのヒステリーは生ずるものとキツシユは言ひました。右の述べた如き陰の裂傷は全く結婚當事者の性的無智によるもので、病的な原因に依るものは性教育によつて除かるべき筈であります。専ら卑慾上の興味を主眼として作られた笑畫を以て教へる如き方法は、器關の尋常なものにあつても、位置の變則のため屢々陰の裂傷又は擦過傷を起さしめ、或は子宮病の原因を作るもので、危険の上もないのであります。

高砂に三々九度の盃も終り、花耻かしい色直しの席も濟んで、いざ床入りといふことになりす。蘭燈影ほのかな翠帳紅圍の中から、俄に悲痛な叫びが起つて花婿は周章狼狽し、人々は騒ぎ、結局目出かるべき結婚の夜に醫師を招かなくてはならぬやうな事が起ります。この原因は陰癢癢といふ病からで、一旦かゝる目に遭うた新婦は

その後も性交を嫌怖し、遂には性不感症に陥るのであります。

或は處女膜の強靱で破れない場合等にも起るものであります。但しこれは稀であります。また、陰癢癢の原因とならぬまでも、破爪の場合非常な出血に伴うて疼痛を與へ、女子をして驚愕のあまり性交を嫌忌せしめ、遂には不感症に陥らしめるものでありますから、結婚前に一應醫師の診断を受けて、その際発見されたならば、手術をうけておかなければならぬのであります。

其の他尙ほ色々の障害のある場合があります。それは床入りの夜に感動の餘り急に月經の來潮があることですが、かゝる場合には女子は非常に羞耻し、且つ汚れたものと思つてゐるのですから、勿論性交があつてはなりません。月經の時に於ける性交は種々な婦人病の原因を作るものであります。それから女子の耻毛の過多なる場合にも性急であつたり、體位が變則であつたりしますと負傷を受けることがあります。男子の耻毛のためにも負傷は起りますが、それは極めて少く、負傷は兩方が受ける場合も

片方だけの場合もあります。尙ほ處女膜は強靱でなくとも、破爪の際は多少の出血を伴ふものでありますから、これは良人たるものがよく此の當然である事を教へて性的無智な處女に安心せしめなくてはなりません。そうでないと性交を恐怖し、快感を理解せずして不感症に陥らぬとも限らないからであります。

### 娘へ婿を擇むに就ての秘訣

娘が年頃になつて、念入りにお化粧させるのも、これを美しく着飾らして外出させるのも、別に誰に見せやうとての目標とするものではありません。つまりは良い婿さんを見出してこれと結婚させ、早く安心するやうにしたいと云ふ親心からのことでもあります。否、小學校を卒業して義務教育を終へてから後に、殊更娘を女學校に入れて、これを卒業させるのも詮ずるところ、矢張り良縁を得させたいからのことでもあります。今日の時勢は、せめて高等女學校でも卒業さしておかぬと、如何に美人であり、財産

家の箱入り娘であるからとて、碌な所へ縁附かれぬやうになつてしまひます。よし女學校へ入つて中等教育を受けて居らぬ娘さん達でも、三四十一年前のやうに今も尙ほ良縁を得るに事缺かぬ時勢であつたなら、都鄙の公私女學校は今日の如く全盛を極めず必ずや門前雀羅を張るの寂しい光景を呈するに至りませう。

世間の親達が、中には乏しい間を随分無理な工面までして、その娘達を女學校へ入れておくのも畢竟斯くその娘達のために良い婿を探し出して、恰好なところへ縁附きたいからであるとしたら、娘達が女學校を卒業すると同時に、その親達の胸に當然まづ何より先に起つてくる問題は、如何にすれば娘の良人として耻かしからず、娘の一生を幸福なものにしてくれる者を見出し得られるかといふ一事であります。どんな人物でも男でありさへすればそれで宜しい——嫁に遣らう、婿にしやうといふのなら、固より何の苦勞も要らぬ話ですが、さて良い者を我が娘のために擇み、そこへ縁

附けやうといふ段になれば、それは決して容易の業ではありませぬ。蓋し、世の中には、如何に水が多くあつても飲める水の少いやうに、如何に年齢だけは娘の良人として適はしい青年が多くあつても、良人として我が娘の一生を託するに足る人物は至つて少いからであります。

古い希臘の物語作者は、女の一生を慶福に充ちたものになさしめ得る良人の資格として第一健康、第二容貌、第三資産、第四力量の四つを挙げ、これ等の條件を具備した男は、若い女の好んで求めるところなりとし、これを理想の良人として禮讚し、その韻文物語のうちに描寫してゐますが、第三の條件たる資産の如きは、今日のやうに自由競争の旺んなる時代となつては、伊太利の黒シャツ宰相ムツソリーニの如く、鍛冶屋の一工人から身を起して、一國を支配する最高の位置に昇り得られもするゆゑ、最早問題とするのは足りませんが、今日の親達はその娘達のために、その一生を幸福のものたらしめんとして良縁を探し、あれかこれかと婿を選択するに當つても、先づ

健康を第一の條件とせねばなりません。二千餘年前なる希臘の者に於ても、將亦昭和の今日に於ても、その妻の一生を幸福ならしめ得る良人の資格としては、依然健康が第一なのであります。

既に結婚して家庭を有つてゐる男が、一日でも妻に病みつかれると、その慘目さは到底筆紙に盡し難いものがあります。我が杖ともし柱ともして手頼にしてゐる良人が、常に病身で弱々しくあつたとしたら、これが妻たるもの、心細さは、妻に病み臥かれたときの夫以上で、第一女として結婚により當然享くべき筈の快樂を充分に味はして貰へず、たとひ子女が生れたとしても、それが矢張り病身で、徒に苦勞の種を増すのみとなり、あたら一生を、良人や子女の看病に過さねばならぬやうな破目に陥ることになります。若しそれ病身の極、良に天死でもされると萬事こゝに休すで、折角の可愛い娘を、若い身空で酷たらしくも、寡婦にしてしまはねばならぬのであります。



## 健康長命の婿を發見する法

然るに、娘のために嫁入口を探し廻る世間の親達は、娘の良人になるべき若者の才能、學歷、資産、収入、品行、性癖、家門、血統の如何までは、嚴重に吟味しますが兎角その健康如何を詮議することを等閑に附し勝ちであります。それでは到底我が娘の一生を幸福ならしめ得る婿を探しあてる譯にはゆくものではありません。第一その婿に選ばれた男が、如何に才能あり學識あり資産あり、品行が方正で悪い性癖なく、家門高くして血統が純潔であるとしても、その體質が虚弱で、短命をしさうな不健康状態にあつたのでは、若い娘がその婿に對して熱烈な愛着の情を催さず、これを衷心から好いて惚れる氣になれるものではないのであります。そんなことでは家庭の圓滿を献くは必定であります。若い娘達の好く男は生氣激濁としてその全身に溢れ、如何に病魔が襲うて來て叩きのめさうとしても、決して死なぬといふ元氣を藏しての

る若人であります。我が可愛い娘を好かぬ男と添ひ遂げしめ、一生を不快に送らしむるのは、親として如何にも残忍の措置であると謂はねばならぬのであります。

さればとて、婿の候補者として挙げられてゐる青年の健康状態を明かにするために生命保險會社が被保險人の身體検査を行ふときのやうに、醫師を一々派遣し、嚴重なる健康診断をその人達に對して行ふ譯にゆくものでもなければ、また醫師の作製した健康診断書の提出を、それ等の人々に迫り得られる譯のものでもないとしましたら、如何にすれば我が娘の婿たるべき青年の體質が健康にして、長壽を享受し得られる資格ありや否やを知ることが出来るでありませんか。是には一つの秘訣があります。即ち血統に就ての詮索調査をするときに、従來行はれてゐる如く、癩病或は癌の血統であるかどうか、結核患者が血族の間にあつたかどうか、といふ如き條項の吟味のみに止めず、その青年の家系は長壽の血統であるかどうかを調べることがそれであり、我が娘の良人にしやうとする青年の祖父も祖母も、曾祖父も曾祖母も共に七十歳以上

の長壽を保ち、その伯父や伯母にも長壽の者が多く、父母も息災で病身でなく、至極健康で存在してゐるとしましたら、今我が娘のために婿たらしめんとする青年も、先づ以て十中八九までは不健康體の所有者でなく、長命して娘の一生を幸福ならしめ得るものと判断して大過はありません。これは東西の生命保險會社が多年の經驗と統計とより歸納し得た結論に根據をおくもので、決して出鱈目の一家言ではありません。それから一見したところ、肥つた人は如何にも丈夫で長命をなし得られさうに思へますが、存外短命なもので、腎臓や心臓の疾患に罹つたり、尿中毒を起したり、また腦溢血を發したりして早く斃れる危険がありますから、この種の體質體格ある青年は成るべく我が娘の一生つれ添ふ良人として擇ぶことを避くべきであります。若い娘達の良人として最も好ましいのは、筋骨が發達してゐて、ビチ／＼しながら引き締つたどつちかといへば寧ろ疲せてゐるくらゐで、しかも血色のよい活潑な青年でありますかういふ體格體質の男は、病に罹ることが稀れで長命するのみならず、若い娘に屹度

好かれます。従つて自然とその家庭も圓滿幸福であるわけのものであります。その青年の容貌の如きは、敢て問ふの要がありません。

花柳病の有無を詮議せねばならぬ如きは、因よと云ふ迄もなく、若しそんな病氣に罹つてゐる青年を、それと知らずして我が娘の良人にでもしたら病毒は結婚後直ぐ傳染して可愛い娘を婦人病に罹らしめ、一生病苦に嘆かしめざるべからざるに至るのみならず、子女が出來ぬやうになつたり、流産をしたりするやうにもなります。たとひ子女が生れたにしても、花柳病中の微毒の如きは必ず遺傳し、生れた子女を虚弱の病身なものにしたり、或は智能の低級なるものになります。恐るべきは實に花柳病であります。

併し花柳病に罹つてゐる男は、努めてこれを隠蔽し秘密にしてゐますから、これを知ることには却々容易ではありませんが、平素の行狀や當人の友人などに就て、それとなく探索すれば、自然と知れてくるものであります。親達に於てこの方面の探索が疎

かであつたが爲めに、娘が縁附くや否や忽ち良人の痲病に感染し、痲毒性子宮内膜炎を患ひ、子宮内膜炎の搔爬手術を受けねばならぬやうになつたりなぞする例は、世間に決して尠くありません。

### 婿を選ぶ方法

如何に資産があつても、如何に家門が高くても、これを繼承する當人が馬鹿者であつたり、不心得の人間であつたりすれば、家門の高いのは、徒に世間より嘲笑を招く因をなすのみとなり、巨萬の富も一朝にして消盡し、無一文となつてしまふばかりですから、親の情としては、我が娘を家門の高く、資産の豊かな家の息子に嫁がせたいに相違ありませんが、それ等の條件は、これを條件とせず、將來爲すあるの人物——平たく謂へば現在の位置はどうであらうとも、將來に於て立身出世の見込みある青年に嫁がせるやう、この種の人物を我が娘の婿とすることに銳意すべきであります。

妻が子女を遺して残くなつたため、再婚でもしやうとするやうな男ならば、既に相當の位置も出来てゐるでせうが、女學校を卒業したばかりのホヤ／＼の無垢な娘を縁附けやうとする先方は、そんな男でなく、初婚の青年であるのですから、それが果して將來立身出世するものやら、將亦一生何の爲すところもなく、醉生夢死に終るやうな附甲斐ない人間であるものやら、俄に逆睹し難いものがあります。青年の前途は全く以て海のものとも山のものともつかぬ未知數の X で、  
? だらけのもの  
であります。何れの親達も斯く未知數である青年達の間より、女學校を卒業した我が娘のために前途に富んだ人物を発見し、これと縁組させたいと云ふのですから、天眼通を有たない限り、婿擇みはなかくの難事であると云はねばなりません。  
併し、この難事を易々として成し遂げ、その前途が有望で、必ず立身出世するに定まつてゐる青年を、發見し得られる秘訣がないでもありません。それは豫め大學や專門學校の教授連に手を廻して渡りをつけておき、その推薦を請ふやうにすることであ

ります。教授連は日夕教室に於て、或はその私宅に於て、多数の學生達に接觸し、或はまた彼等の試験答案などを審査してゐる間に、その前途に囑望し得られるやうな、立身出世をしさうに見える青年があれば、恰も曩中の錐の如く、必ずや頭角を衆に擢で、顯はすことになりすから、直ぐそれと眼につくものです。その判断には、先づ以て過りが無いのみならず、教育者たる立場もあつて、無責任な推薦を敢てするやうな憂ひもありませんから、日夕これを手にかけて教育してきた教授の推薦してくれる青年は、將來屹度立身出世するに定まつてゐるために、素封家などで娘の婿に將來有爲の青年を得んとして苦心してゐる向は、それぞれ縁故を辿つて、官立大學の教授に取入り、毎年卒業期になりますと種々有利の好條件を提出し、數萬圓の持參金をつけて嫁入りさすとか、或は結婚すれば直ぐ立派な住宅を建築してやるとか、乃至また婿を洋行さしてやるとかと、牡丹餅で頬邊を叩くやうな話を肴にして、婿の推薦方を續續依頼してゐると云ふことであります。

これは前途に望み多き有爲の青年を、餘り勞せずして我が娘の婿に引き中て得る親達にとつての秘訣であります。世の中のあらゆる親達は、必ずしも皆大學や専門學校の教授連に渡りをつけて、これと懇意になり得られるものではありません。中にはどう辿つてみても、全く縁故のつけやうがないと云ふのがあります。そんな親達のために、また必ず將來立身出世するに定まつてゐる婿を、我が娘のために容易に引きあて得られる秘訣があります。それは親でない他人から學費を買がれて、中等以上の教育を受けた青年に、我が娘を嫁がせることであります。

### 斯ういふ人物に託せ

親はその子に對して、これを教育する義務が自然にあります。その賢と愚との如きは敢て問ふところではありません。その將來は至つて望み少く、立身出世をする見込が全然なくても、資力さへこれに堪へ得られれば、單に親たるが故に、その子を中等學

校に入學せしめた上に、更に高等教育を受けしむるため、専門學校へでも大學へでも入れることとなります。また子は子で、親許から學費を供給されて、中等以上の教育を受け、或は専門學校に入り、或は大學へ入學したからとて、これを當然のこととし格別痛切なる義務責任をこれに對して感ずるわけでもなく、平然としてゐるのが世間の例であります。

併し、親でも何でもない全然の他人が、一寸した縁故のあるばかりで、兎に角相當の金額を月々數年間貢ぎ、青年を専門學校或は大學へ送り、これに高等教育を受けしめやうとする段になりますと、必ずや先づその青年の人物才能を詮議し、その將來が有望で果して大に爲すあるに足るや否やの見究めをつけてからの後にします。無爲にして終りさうな、將來に見込のない青年に對しては、學費の支給などをするものでありません。如何に仲に立つ者があつて、世話を頼んでも、拒絶してしまふにきまつてゐます。仲に立つ者も、後日に至り失敗でもされると自分が責任を負はねばならぬや

うになる關係から、その青年の人物才能を充分に見込んだ上でなければ、他人へ對して學費を出して貰ふことの依頼など、決してするものではありません。

加之、親許からの送金によらず、他人から學費を貢がれて學問をした青年は、その出資者に對しての義務責任を強く感じ、その知遇に酬ゆるため、必ず立身出世を遂げねばならぬとの軒昇たる意氣込がありますから、親許より學費をもらつて勉強した者とは、在學中に於ても將亦卒業後世間へ出てからも、その心の持ち方に異なるところがあつて、衆に擡で、頭角を顯はさうと努力する。その結果は必ずや豫期の如き立身出世となります。しかも謂ゆる苦學生の如く、荒んださもしい心持や斜視んだ根性にはなつて居りませんのですから、親許ならぬ他人に學費を貢がれて中等以上の教育を受けた青年を我が娘の婿に選み、これを結婚させるやうにすれば、その娘は將來立身出世をする有爲の丈夫を良人とすることを得て名譽やら富貴やらを、良人と共に一生涯分ち荷ひ得られることとなるのであります。これが實例もまた決して世間に尠くあ

りません。

その上、他人から學費を貰がれて、中等以上の教育を受け、専門學校或は大學を卒業した者は、學生時代から上長者との交渉があるの結果、抑制謙讓の美德に馴らされて來てゐますから、我が妻となつたものゝ父母や、その親類縁者なぞに對しても、結婚後同じく抑制謙讓の美德を導つて交際することゝなり、それ等の人々との折合が萬事に於て圓滿に運ばれてゆくものであります。岳父岳母として、固よりこれに優る悦びはないものであります。されば學費を他人から貰がれて學問をした青年を、女學校を卒業した我が娘の婿とすれば、全く以て三國一の婿を引きあてたことになります。然るに、世間の愚な親達の間には、親元から學費の支給を受くるに難く、他人よりそれを貰がれて學問をしたやうな青年を、兎角素性の賤しいものとして蔑視し、これを我が娘の婿としたがらぬ傾向があります。思はざるも甚だしいと云ふべしで、將來立身出世をするものとの折紙が附いて、しかも岳父岳母に懇切丁寧な青年は、却つて

彼等の間にあるのです。

### 天才必ずしも良縁にあらず

天、二物を與へずと云ふ支那の格言があります。女學校をこの春卒業した娘のために婿を擇ぼうとする親達に於ても、矢張りこの道理だけは辨へておかねばならぬもので、何から何まで揃つた缺點のない婿を探し出して、これに娘を嫁入りさせやうとしても、とても出来るものではありません。將來立身出世をして、大に天下に名を成さうと云ふやうな婿ならば、何よりも、その妻を愛するといふ譯にはゆかず、妻よりは職務を愛し、事業を愛し、勤勞を愛し、研究を愛し、製作を愛し、思索を愛し、夢想を愛し、國家を愛し、郷黨を愛し、妻の如きは往々にして棄て、顧みざるに至り、家庭に對しても我れ關せず焉、の態度を執るやうになり勝つものであります。これに反し、何ものよりも我が妻を愛し、我が家庭に執着し、一切萬事家庭へ妻子の幸福か

ら割出して決するやうな男には、これに立身出世を望んでも、到底駄目なものであります。されば、世間の親達にして、若し我が娘の婿に、何ものよりも妻を愛し、家庭を愛するやうな青年を得んとするならば、これに立身出世を望む如き野心は全く棄ててしまひ、豫めこの方針に基き、婿を物色することにせねばならぬのであります。立身出世によつて、大に天下に名を成さうとする如き大志ある青年は、功名心が熾烈でありますから、これが爲めに妻や家庭を犠牲に供することなどは、屁とも思つてをらぬものであります。これに向つて何ものよりもその妻を愛せよ、その家庭を懐かく思へよ、と註文する如きは、寧ろ註文する者の方が無理であります。

天才は人類の精華で、或は先人未發の大發見をしたり、萬代に傳へられる大製作を遺したりして、その聲名を一代に轟かし、立身出世以上の立身出世をするが、これまた妻に對する不斷不變の愛情を以てするものでもなければ、家庭に執着し、念々切々の情を以てこれに臨むものでもありません。古今東西の天才傳を緝けば、直ぐそれと

肯かれるやうに、天才の愛情は至つて變り易く、移り氣の多いものです。その上氣難かしいのがこれ天才の特徴であるのですから、これに嫁して、その妻となつた娘は、始終良人の愛の信頼なきを感じて、煩悶したり心配したり、氣苦勞したりしてばかり活し、よし人妻として天才の配偶である榮譽は荷ひ得ても、家庭の平和と結婚生活の幸福とを思ふ存分味ひ得られるものではありません。されば我が娘をして幸福にして波瀾の少い結婚生活に入らしめんとするならば、世の親達たるものは、天才の美名に眩はされて、これを我が娘の婿としやうといふ如き氣を起してはなりません。但し英國の文豪カーライルの妻の如く、その良人から「この珈琲は温くて可かん」と劍突を喰はさるれば、言下に、赤熱くなつた焼火箸を取つて珈琲茶碗の中へジュツと突つ込み「今度は熱いよ」との應答をなし得られるほどの度胸ある娘を有つた者はこの限りにあらずです。

また文藝や演藝に豊かな趣味を有つてゐると稱せらるゝ青年も、決してその妻や家庭

を熱愛し、これが爲めにあらゆるものを犠牲に供して惜まぬ種類の男ではありません。演藝や文藝に興味の豊かな男は、楽しみや慰安を取て妻や家庭に求めなくとも、幾らでもこれを家庭や妻以外に求め得られる法があるのみならず、好んで妻や家庭以外にこれを求めようとする傾向があります。殊にこの種の青年は、兎角妻以外の女との交渉を生じ易い境地におかれることになりすから、おのづと三角關係なんかといふ七面倒な事件を誘致して來ます。されば女學校を卒業したばかりの初心な娘のために、婿を擇ばうとする親達にして、若しその娘を幸福なる結婚生活を送らしめやうとならばその努めて文藝や演藝に興味のある青年へ白羽の矢を立つることを避くると共に、娘そのものにも文藝や演藝の中毒に罹つて漫りに文藝家や演藝家を憧憬するに至るが如きことのないやうに、平素より嚴重なる家庭教育を施しておく要があります。それから多數の下女下男に侍かれて富裕の家庭に育つた青年は、兎角スボイルされて我儘勝手に流れ易く、結婚後も因よりその妻に對して懇切の情を盡してくれる種類の

の男でありませんから、世の親達たるものは、資産の富裕であるのに釣り込まれて、この種の青年を我が娘の婿にしやうとする如き不所存を起してはなりません。斯る青年と我が娘を結婚させるのは、恰も最愛の娘を地獄へ逐ひやるにも等しいのであります。

然らば、如何なる青年が何ものよりもその妻を愛し、家庭を何ものにも優る我が唯一の安居とするかと云ひますと、それは毫も才氣の煥發せる閃きなく、霸氣の如きは一切持合せず、何處となくオットリとしてヌーボー式なところがあつて、その居住する近所近邊の兒童達から「小父さんく」と慕はれるやうな青年がそれでありす。兒童を可愛がり、兒童に慕はれるやうな青年でさへあればそれは屹度家庭向の性質所有者で、結婚後不變不斷の熱情を以てその妻を可愛がつてくれるに相違ありませんから世の親達にして斯る青年を見出し、これに女學校卒業の我が娘を嫁せしむれば、その娘は一生結婚生活の平和なる幸福を享受し得ること請合であります。殊に、その



青年の両親が存生してゐれば、尙更らに結構であります。

## 女性の運命

結婚の禮式を書く前に、女性の運命といふことを述べて見たいと思ひます。一體人間に運といふものがあるかどうか、若し人間に運命なるものがあるならば、それが人間などのやうに支配するのであらうか。また天地間に丁と定まつた理法があつて、人間はその理法の外に一足も出ることが出来ないものであるとしますと、人は必然の理法に支配せられて、別段に運命といふものは無いやうになつてしまふのでありますがその必然の理法は、人力でどうする事も出来ないとしますと、これも亦一種の運命と云ふべきであります。

然らば運命とは、何ういふ事であるかと云ふと、判らぬ事を運と云ひ、判る事を運とは言はぬ。例へば何處そこに音楽會があるから行かうと思つたら、運悪くお客が來

て行かれなかつたとか、或は運よく友達が來てくれたから、幸に出かけられたとか即ち自分の思ひ掛けない偶然の事、又は豫想外の事を運と云つてゐるのであります。更にまた偶然の事とか、思ひ掛けない事でなく、たゞ自分の思ふ通りにならぬ事を運といふ。自分は斯ういふ工合に考へてかうしやうと思つて居たが、その通りにならなかつた折も、運が悪かつたと云ひ、思ひも掛けぬ事が巧くいつた場合には、運が好かつたと云ふのであります。

果して自分が何う考へても、如何ともならない事を運であると斯ういふのでありますと、人間の世の中は實に自分の思ふ通りにはならない事が、多いのであります。儘にならぬが浮世の慣、我々は實際運命といふものに、縦からも横からも支配されてゐると見ることが出来るのであります。

## 運命と遺傳及び境遇

若し夫れ儘にならぬことが運命であるならば、何も彼も儘にならぬのであります。どの位儘にならぬかと云へば、人間思ふやうに生れられるか、生れられぬか、生れてやらうと思つて美しく生れぬものもあり、少し縹緖を悪く、骨董的に生れやうと思つて、美しく生れたりして、さう思ふやうに巧くゆくものではありません。これが即ち運といふものでありませう。

現代の科學はこれに説明を與へます。即ち科學は、それは運命といふものではないそれは遺傳であると云ふのです。遺傳と云ふのは親譲り、即ち親の相が子に傳はつてゆく、或は祖父さん、祖母さんの運が、その子供の氣質、その子供の體質、その子供の個性といふものに影響するのが遺傳であります。成程遺傳の理法といふものがあれば、私共をして斯くの如き相に生み出させたのは、遺傳の理法であるとも言はれませうが、然らば何うしてこんな遺傳を受けなければなりませんか、と云へばこれ到底科學の能く説明し得るところではありません。故に仕方なくこれも運といふのでありま

せう。

更にもう一つ例を申さば、金持の家に生れやうと思つて生れたか、貧乏の家に生れやうと思つて生れたか、これまた自分の考へ通りではありません。金持に育つのも、貧乏に育つのも、みな自分の力ではないのであります。これを科學者は境遇だと云ひます。成程人間には、その人間に依つての境遇の力といふものがあります。その境遇の力が吾々の個性、吾々の氣質、吾々の品格に影響することは、實に大なるものであります。それは考へても判る、金持の家の人と貧乏人の家の人とは、何處となく氣性が違ふ、その金持でも先祖代々金持の家の子供と、成金の家の子供とは何處となく違ふ、また同じ貧乏でも昔は氏素性の正しかつた人であるけれども、今は零落して貧乏になつたといふ人の子供と、先祖代々貧乏な人の子とは矢張り何處となく違ふ。これは何であるかと申しますと、即ち家庭の事情、境遇から來るのであります。

この家庭の境遇と云ふものは、その人の個性、その人の品格を支配することが實に

大なるものであります。併したゞ人間は家庭の境遇に依つてのみ支配されるものではありません。人は家庭に生れて家庭に死ぬものでありますけれども、一足外へ出れば社會の影響といふものがあります。明治や大正、昭和の婦人方と徳川時代の婦人方とはその性格、その氣質、その心持が變つてくるといふことも、これ皆社會の境遇の力であります。吾々は何うしても境遇の力といふものを認めます。それは認めますが、何が故にかゝる境遇に生れたかといふことは、科學が如何に進歩しても、これを説明することは出来ません。自分は何が故に斯くの如き遺傳を受けたか、それも科學では何うしても説明することが出来ませんから、これは運命であると斯ふ言ふのであります。

## 運命と迷信

昔の婦人方は、全くこの運命に支配せられて居りました。この遺傳、この境遇、こ

の運命なるものに支配せられて、その運命の埒外へは一足も出ることが出来ませんでした。これが昔の女性であり、昔の婦人方であります。故に昔の言葉に「人生婦女の身となること勿れ、生涯の苦勞他人に據る」即ち人間に生れては女になつたら困る、生涯の苦しみも楽しみもみな自分以外の他人に據るものであると。これ運命といふことを認めて居るのであります。また幼にして親に障へられ、嫁しては夫に障へられ、老いては子に障へられるといふ、三障五從の説の如きものは、みな女といふものは、外界の境遇に依つて支配せられることの實に大なるものを言ふたのであります。故に昔の婦人は只この運命に囚はれ、運命の翻弄に一代を任して居つたのであります。丁度棹の絶えたる捨小舟が、水の流れのまゝに動いてゆくやうに、運命といふ流れに楫なくして、その流れの儘に行つたのが昔の婦人方であります。

ところが然ういふ風でありますから、昔の婦人が運命といふものを信ずることは非常に篤いものであります。何うかして自分の運が知りたい、自分の運が良いか悪いか

を知りたい、この弱點、これは寧ろ婦人の弱點といふよりは人間の弱點でありますがこの弱點に乗じて現はれたものが種々の迷信であります。それは、人間の運命は生れた年や月で決まつてゐると。こういふので、こう云ふことは當今でも流行ります。生れた年や月によつてその人の運命が定まるのであります。ところがこれは餘り當になりません。同じ年に生れた者が皆同じ運といふ譯には行かない、それは年だけは同じでも、運命は一つに定まりませぬ。然うすると同じ年でも生れた月が違ふからと云ふでせうが、月も同じでも決して運命は同じではありません。して見ると生年月日を以て人間の運命を測定することの迷妄なるは謂ふまでもないことであります。

そこで今度は、専門家でないと判らないやうになります。人間には火の性であるとか、水の性であるとか云ふものがあつて、天地萬物は皆この木火土金水から出來てゐる、この木火土金水に支配せらるべきものである。木性に土性と相性が良いとか、或は火性は水性と相性が悪いとか云ふやうなことで、相性相尅の議論を以て人間の結婚

を定めやうとするやうな迷妄の信仰が行はれます、或は九星、或は家相、或は人相、或は方位と、かういふ工合になります。然ういふ工合に専門になつて來ますと、もつと簡単に自分の運命を知る法がないかと云ふことになります。

そこで、もつと簡単に運命を知る方法としては占であります。この占にも色々あります、八野占、墨色占、辻占、(これは辻で占つたから此の名がある)それから石を打つて占ふ石占、粥を煮て占ふ粥占、疊で占ふ疊占などがあります。斯くして人は皆何うかして自分の運命を知らうとするのであります。

そこで、今度はその運命を知ると何うするか、自分の運命が悪いと定まると、何うかしてその悪運を免れようといふ、この運命轉換の要求からして禁厭といふものが行はれるのであります。平安朝時代の女性はみなこの占、禁厭、祈禱、これ等の迷信によつて支配せられて居つたのであります。それが徳川時代まではこの迷信が勢を得てゐました。今でも猶家庭の奥の方には、これ等の迷妄なる信仰が力を得て居るやう

であります。

けれども、だんく／＼智識の進んだ現代の婦人は、斯の如き迷妄なる信仰に支配せられるものでなく、迷信の闇は智識の光明に照されて参りまして、現代の婦人はたゞ運命のまに／＼流れを下る捨小舟の如きものではなくして、自ら楫をとつてその運命を開拓せんと努力して行くところに、現代婦人の意氣があるを思ふのであります。昔の婦人は運命の婦人であつたのですが、今の女性は女性として自らその運命を開拓せんと努力して居るのであります。この女性としての運命を開拓せんと努力する、こゝに婦人の自覺といふものがあります。この自覺といふことは、自ら自己の使命を覺醒するのであります。我は女として如何なる事を成すべきかと、自分の務めを覺醒してこれに目醒め、自己の行くべき途を進んで行くのであります。

## 夫婦和合の秘訣と相性

夫婦生活に大切なる性格の調和について言つて見ませう。實際に於て人の性格を批判し、夫婦の相性相尅を定めるのに、九星や生れ月の神秘などは、固より取るに足らぬ迷信であると思ふ人もありませう。けれども茲に言ふ體質氣質及び遺傳の關係は、學術的に注意すべき價値のあるものであります。併し遺傳と云つても、例へば一つの親の五人の同胞が、必ずしもその體質、氣質が同様であるといふ風にはゆきませんから、これも單純に考へることは出来ません。

實際に尤も大切なることは、男女各々その實際の氣質性格を充分に調査して、その夫婦たるべき相性、相尅を定めなければならぬのであります。而してその相性は單に木性と木性と、水性と水性といふ風に、同性質が良いといふ譯にはゆきません。一定の異なる性質が組合はされて、そこに適當なる和合、調和が出来るのであります。從足同志の結婚が良くないと云ふのは、同種類の遺傳を受けるといふことが、その一つの條件であります。この場合その遺傳が優良種であれば良いけれども、若し不良性

が重なつたときは、その結果は二重の悪結果を來すからであります。

普通の人の場合には、その精神が程よく調和されてゐますから、その性格の特徴が著明に分りません。これが病的若くは變態のものになりますと、その氣質の特徴が著明になつて來ます。人間のこの著名なる白か赤か黒かの特徴を知りたる知識によつてこれを常人に應用するときに、稍明かに人々の氣質の相違を認めることが出來ます。但しその特徴が著明になるほど、それは變人畸人天才等となり、進んでは精神病となります。

夫婦の相性は成るべくこれを智力の上からも、氣質の上からも、常人の範圍の内に選ばなければなりません。そこでこの變態のものを分類するに、先づ分量的にその人の能力、狭く言へば知識の上下を分けます。俗に低能といふのは、生活に對する適應力、即ち精神機能の常人に劣るものを云ふのであります。これを一概に物識りであるとか、記憶力が良いとか云ふことで定めやうとしますと、時々大なる誤りに陥ること

があります。それは白痴にでも、随分常人の及ばない特殊の能力を發揮することがあるからであります。たゞその人の全體から云へば、生活に對する適應性がなくて、愚鈍であるのであります。今次に諸項に就て述べませう。素質と云ふのは、生れつきの體質氣質をいふのであります。

### 神經質性素質

ヒステリー性素質

意志薄弱性素質

感情爽快性素質

感情沈鬱性素質

感情執着性素質

精神乖離性素質

▽神經質性 とは常に自分の身を省みず、大事をとると云ふ氣質で、小心翼々であり

ます。石橋を叩いて渡るといふ風で、走つても心に足許を氣にするといふ風であります。これが常に自分の病氣を氣にするときに、謂ゆる神経衰弱になり、不快の感じを氣にし、取越し苦勞を心配するときに強迫観念といふものになります。この性の人には精神異状になることはなく、粗暴、冒險、自殺等になることもありません。この性人は、同性が揃つても可けません、感情爽快性のものと組合せれば最も良い執着性や沈鬱性とも良くありません。

▽ヒステリー性 とは、感情が過敏性で、些細の事にも感情がたかまり、氣が變り易い。丁度小兒のやうに忽ちに泣き、忽ちに怒るといふ風の氣質であります。憐れみも強く、怨みも強いが、皆一時性であります。これが病的になれば種々のヒステリー病が起り、或は自殺の真似や實際の自殺にもなり、萬引にもなり、また一時性の精神病にもなります。ヒステリー症は俗に女に多いと考へられてをりますけれども、大體から言へば女に五、男に三、小兒に二といふ割合に起るものでありますから、女に限つ

たことはありません。併し一般から見れば、感情過敏といふことは、女と小兒に多い氣質であります。この氣質同志では相性が良くありませんが、意志薄弱性とか、感情執着性のものとは調和が出来て、相性が良い。神經質とか、沈鬱性のものとは相尅でありまして、火と水のやうなものであります。

▽意志薄弱性 とは、亥の年生れのやうに、感情の鈍い、氣のない、すばらで、人生の慾望の乏しい怠惰のものであります。これでまた猪のやうに向ふ見すの猪突的のものにもなります。良い方では溫和で氣が大きく鷹揚であります。物に動せず大勇であります。ありますが、悪ければ放逸、浮浪、悖德、酒精中毒、犯罪等になります。一時性の精神病にもなります。この性は同性も餘り悪くもありませんが、相性は神経質、執着性ヒステリー性であり、爽快性、沈鬱性、乖離性とは餘り宜しくありません。

▽感情爽快性 とは、陽氣で氣のはしやいた氣質で、女で云へばお轉婆であり、快活

で愛想よく、他人の世話好きであります。悪くなれば粗忽つかしくて身が修らず、濫費者放蕩者になり、病的になれば、躁病になります。この性も同性が組合つては火と火との相尅になります。沈鬱性のもとも良くありません。

この性は爽快と沈鬱とが同一の人に交代して起り易いものであります。神経質とか執着性とか相性であります。ヒステリー性とも良くありません。

▽沈鬱性 とは、爽快性と反対のものであります。

▽感情執着性 とは、物事に凝り性のもので、何事にも思ひ立つたことは、不撓不屈に何處までもこれに熱中する。悪女の深情とか云ふことがありますが、愛情にもしつこく、また怨みにも執念深い。良い方面に熱中する人ならば宜しいが、悪い方面に執着の取れないのは困ります。

この性のものは、何かにつけて権利義務を主張して、紛争を好むものもあれば、學者發明家もあり、政治に熱中するもの、宗教に感溺するもの等があり、これが精神病と

なれば偏執病といふものになります。この性のものが二人揃つては困りますが、神経質や沈鬱性、爽快性のもとも相性が良くありません。ヒステリー性とか意志薄弱性のものとは相性が宜しい。

▽精神乖離性 とは、精神が全體に調和のとれない人で、精神の發達が偏頗であります。中には智識の甚だ優れて學校の成績が優秀なものもありますが、陰鬱で孤獨で人と交際しないとか、何事をするにも非常に不器用であるとか云ふことがあり、また學校の課目でも語學は非常に能く出来るが習字や書字が非常に劣るとか云ふことがあります。昔から詩人や藝術家にはこの様な人が多い。

又この性と意志薄弱性のもとは、種々の色慾異常といふものがあります。一寸これは表面にはあらはれないものでありますから、ツイこの様な人と縁組をしたときは、大なる災難であります。凡そこの性のものは、結婚の相性としては、餘り良くないものであります。



以上述べたところは、直ちに實際に應用し得る程詳しく説明することは出来ませんが、けれども、たゞこれに依つて人生の最も大なる不幸の分るところの結婚といふことに就て、その相性を選ぶといふことは、甚だ大切であるといふことを知り、亦以て操縦法の急所ともせば役立つことと思ふのであります。

男女が互ひに相愛するといふことは、一般の標準は男は女を保護するといふ性情から、可憐にやさしきを愛し、女は男に頼り扶けられるといふ性情から、強く男々しきを愛するものであります。然るにこれがちよつと常態心理を逸して享樂主義、利那主義、戀愛至上主義とかいふ世の悪思想にかぶれるときには、種々の變形したる愛情の現はれになることがあります。即ち女が女形の俳優を愛したり、若い男が表情きはどく、これを愛するに手ごたへのないやうな女や、或は氣のないうつとりとした自分の自由自在になるやうな女を愛するとか云ふやうなこともあり得ます。戀愛至上主義とか云ふやうな立場からの自由結婚が、決して必ず幸福の終りを見ないと云ふことも、大

にこの關係があるのであります。

▽五行の相生相尅 然らば五行の相生相尅とは何か。平たく言へば五行の順逆で五原素の内の二つ宛が互ひに相生と順に和合するものと、相尅と互ひに逆に和合しないものとがあつて、高有造化の妙をつくすと云ふのであります。相生と云ふのは、

- 木は火を生じ
- 火は土を生じ
- 土は金を生じ
- 金は水を生じ
- 水は木を生じ

の五つで、これは相生であり、木と土、土と水、水と火、火と金、金と木は相會すれば互ひに不和合で滅殺の形にあるのでこれは相尅であります。いづれも陰陽の道理に屬すべきものであります。

夫婦の間でも無論合つてゐる方が宜いのでありますけれども、然し餘りびつたり合ひ過ぎますと、そこに活氣といふものが湧いて來ません。そうせう、人間にしても

餘り幸福な境遇に居りますと、何うしても智識が進歩しません、ところが様々な艱難辛苦をしますと何と云つても智識が進歩します。つまり伶俐になるのでありまして、夫婦の間でも然うであります。相性の良いのは家庭が圓滿に行くから波瀾が起りませんが、その變り活氣に乏しい。相性の良くない夫婦はよく争ひもする、而しそれだけ活氣があります。これは參酌すべき事柄ですが、以下九星に依る種々の事項を述べることに致します。

### 九星の相性法

九星では人事の吉凶禍福運勢の隆盛消長を鑑定する事ではありますが、その吉凶を判断するには五行生尅の理に基き、その上各宮の象意等を考へて種々なる判断が出来るのであります。相生尅は前述の通りであります、又一白は水、二黒五黄八白は土三碧四緑は木、六白七赤は金、九紫は火に属するので、これを能く心得て置かねばなりません。

ません。

### 縁談の占ひ

縁談の成否はその占ふ日と時との盤を作り、男女相互の本命星のゐる座を見、又その掛れる星によりて成否が分れるのであります。然し夫婦となつて後の運勢は、結婚當時の運氣やまた相生の良否に大關係がありますから參酌すべきであります。

盤星九の日

九巽 ●	五離	七坤 △
八震	一中	三兌 ○
四艮	六坎 ×	二乾

盤星九の時

三巽	八離 ×	一坤
二震 ○	四宮中	六兌
七艮 ●	九坎	五乾

△相互の星が中宮にて重り合ひたる時は、その縁談が調ひて成立するのであります。

△相互の本命星が日と時の盤にて同宮に居る時。

△相互の本命星が巽宮と乾宮と兌宮に入りて相對する時

(圖中○印及び●印)



この九星盤は昭和三年より同十一年まで、ありますが、九星は九つなれば昭和十二年となれば又元へ戻つて繰るのであります。それ故何年には自分の星がどの方位にあつて的殺は何處、五黄殺、暗劍殺は何處と直に調べられます。又月、日、時の盤に應用して見るも宜しい。例へば一白の月と云へば一白が中央に居る、即ち一白中宮の月のことであります。又二黒の日と云へば、二黒中宮の日。三碧の時と云へば三碧中宮の時でありますから、月日時共にこの圖に對應して見ますと、何星はこの方角に居るか、又何星は何宮に居るかと云ふことが一日して分るのであります。それ故方角の吉凶などを調べるには此圖によつて本命、的殺、五黄殺、暗劍殺等を知るのであります。因に本年即ち昭和三年は九紫火星であります

△相互の星が坤宮と艮宮か、離宮と坎宮に居して相對する時（圖中△印及び×印）  
 △相互の星が相生の所に居るも相對せずしてその上掛れる星が相尅なるときは、縁談  
 調はぬのであります。

この天盤と地盤を組む（日と時との盤）方法は、例へば此處に一白の人があつて失  
 物を八白の日の二黒の時に占ふとすれば、圖のやうに組むのであります。

盤の日

七 宮 巽	三 宮 離	五 宮 坤
六 宮 震	八 宮 中	一 宮 兌
二 宮 艮	四 宮 坎	九 宮 乾

盤の時

一 宮 巽	六 宮 離	八 宮 坤
九 宮 震	二 宮 中	四 宮 兌
五 宮 艮	七 宮 坎	三 宮 乾

この圖で見ますと時の盤では  
 一白巽宮に居して日の盤の七  
 赤掛り、日の盤では一白兌宮  
 に居して時の盤の四緑掛ると  
 見るのであります。判断の仕

方は一白は時の盤にては、その居る巽宮とも又掛れる七赤とも相生であります。次に

日の盤では、その居る兌宮とも相生で、掛れる四緑とも相生であります。然らばこの  
 失物は婦人用の器具か又は金銭で、年若き婦人の遠方へ持ち行きしと判断が出来るの  
 であります。すべて九星術の判断は、其人の本命星の居る宮の象意と掛れる星の相生  
 相尅によつて鑑定するのが正しい判断法であります。

然しその個人々々の生れ歳の星が、その年の何に當るかと言ふことを見るのが緊要  
 の事でありませう。世間多くは一月一日が元旦で年が改まるから、その年の運命を支配  
 する九星の星も變るだらうと思ふ人もありますが、これは大なる誤りであります。た  
 とへば大正三年生れの人は同年二月五日午前〇時二十九分に立春の節に入りし故、そ  
 の以後の人は甲寅五黄土星が本命ですけれども、二月五日午前〇時二十九分以前の生  
 れは癸丑六白金星が本命となります。これ等はよく心得ねばならぬことであります。

### 十干天稟の性質と相性の配合

十干は一つには天干とも云つて、人の運命や性質を知るには必要なものであります。この十干や十二支は陰陽の二性に分れて居るのであります。

▽甲年生れ

甲は陽性の干で、この年に生れた人は性質至つて勇敢でありますから、その風采も凜然と犯すべからざるところがあります。又表面は物に無頓着のやうに見えますが、腹には却々考へ深い所がある故間々大成功を爲す人があります。

▽乙年生れ

乙年は陰性で、この年に生れた人は表面至つて柔和に萬事遠慮勝ですから、自ら因循に見え、他人との交際上甚だ損でありますから、宜しく快活にするが宜しい。

▽丙年生れ

丙は陽性で、この年に生れた人は性質至つて陽氣に交際上手であります。然しよく人の氣を計り、目輕卒にする氣味ある故、兎角人の信用に障りがあります。

上に取入ることが上手ゆえ、初年よりは中年以後の運勢が盛んであります。

▽丁年生れ

丁は陰性で、この年に生れた人は性質至つて温順に、人事にも至つて親切ですから他人との交際も至極圓滿ですが、晩年の運勢は餘程注意を要します。

▽戊年生れ

戊は陽性で、この年に生れた人は、外見は倨傲の様子がありませんから一寸人付合がわるい、又我意を通さうとする氣強き故、よく目上に逆ひ、それが爲めに運氣に障りがあります。

▽己年生れ

己は陰性で、この年に生れた人は萬事器用の質ですが、人の成功を猜み羨む心があつて、運氣に障りがあり、晩年却つて困窮することがありますから、宜しく注意が肝要であります。

▽庚年生れ

庚は陽性で、この年に生れた人は萬事鷹揚ですが、人を容れることが出来ない、それ故人世話もよく面倒を見ますが、厭き易いのが疵であります。初年中年は心勞多く住所も變りますが、晩年に至つて安樂の運命が得られます。

▽辛年生れ

辛は陰性で、この年に生れた人は兎角取越し苦勞多く、陰氣の質であります。世辭愛嬌があつて交際は巧みですが、口程に親切氣が少いので、交際が長く續きません。注意して此癖を改めれば、晩年大に好運を得られます。

▽壬年生れ

壬は陽性で、この年に生れた人は、慈悲の心深くして人世話も親切ゆえ、衆人の人望を得て自ら人に長たるの徳分があります。併し忍耐力に乏しく氣移り多きゆえ初年中年は運勢も浮沈も多いが、晩年は至極幸福であります。

▽癸年生れ

癸は陰性で、この年に生れた人は至つて勉強心に富んで忍耐力がありますから、屢々悲境に陥ることあるも自分の力で運命を開拓するゆえ、間々大事を爲す人もありますが、兎に角一生中浮沈の多き運勢の生れであります。

斯様に十干から受けた天稟の性質ですから、この配合さへ宜しかつたら、よい夫婦が出来るのであります。その配合は、

- 1
- 甲乙生れの男は……戊己生れの女
  - 丙丁生れの男は……庚辛生れの女
  - 戊己生れの男は……壬癸生れの女
  - 庚辛生れの男は……甲乙生れの女
  - 壬癸生れの男は……丙丁生れの女

2

甲乙生れの女は……庚辛生れの男  
 丙丁生れの女は……壬癸生れの男  
 戊己生れの女は……甲乙生れの男  
 庚辛生れの女は……丙丁生れの男  
 壬癸生れの女は……戊己生れの男

第一表の如く男が甲または乙生れならば、女は戊または己生れのものが相性がよく、この反對に男が戊または己生れならば、女は甲または乙生れのものが相性がよいので、第二表の女の方も同様で、すべて第一表第二表とも、男女の干が反對になつても相性なのであります。  
 また相性のよいのは、以上二表の十干の組合せ以外に、次のやうな二つの例外があります。  
 夫婦の干が揃ふとき

夫婦の干が揃ふとき

夫婦の干が相生するとき  
 即ち甲と乙、丙と丁、戊と己、庚と辛、壬と癸をいふやうに、夫婦の生れた年の干が揃ふときであり、また夫婦の生れた年の干が相生する場合があります。

### 六曜星の説明

六曜星の繰り方は舊正月、七月は一日先勝、二日友引は繰り、舊二月一月と、八日友引、二日先負と繰る、其他の月もこれに準うて繰るのであります。

先勝	正月 七月	此日急ぐこと又訴訟事吉、然し午前は凶
友引	二月 八月	此日正午は凶、朝夕吉事に用ひてよし
先負	三月 九月	此日静かな事によし、何事も午前中凶
佛滅	四月 十月	此日何事に惡し、病氣送葬大凶

大安	五月	此日何事も大吉、慶事祝事は詳細あり
赤口	六月 十二月	此日正午のみ吉、朝夕凶、祝事は用ゆべからず

### 十二直の説明

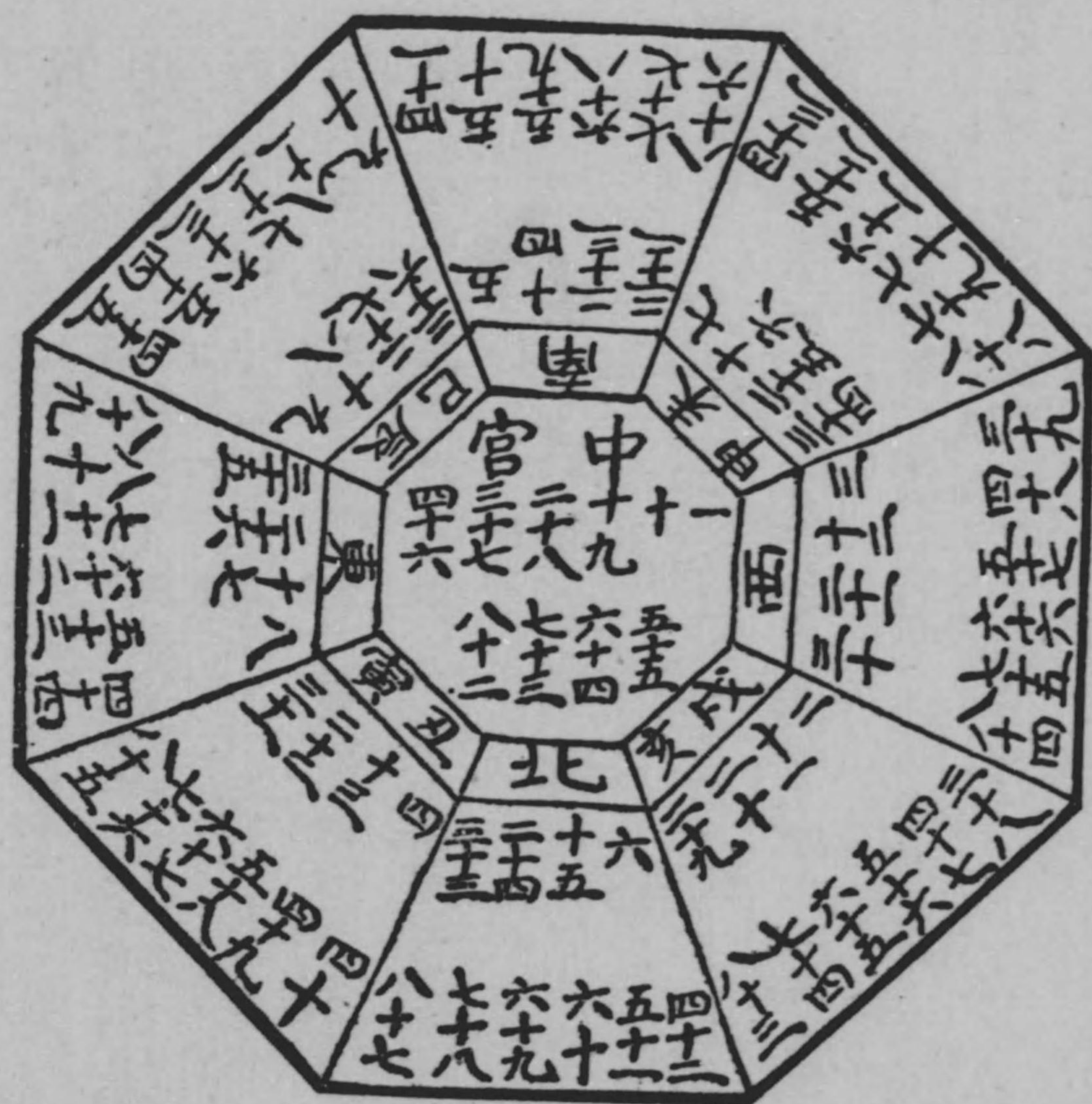
- 建(たつ) 新に事を始むるに吉、其他は凶。
- 除(のぞく) 治病、煤はき等舊を去るに吉、其他には凶。
- 満(みつ) 五穀財物を取入れ、婚姻新築種蒔に吉。
- 平(たいら) 萬事に用ひて吉、但し種蒔に凶。
- 定(さたん) 萬事きまりをつくるに吉、訴訟旅行に凶。
- 執(とる) 財物を取入れ新築種蒔井堀に吉、移轉旅行は凶。
- 破(やぶる) 萬事に凶、但し狩獵、破屋修繕等に吉。

- 危(あやふ) 萬事に凶、用ふべからず。
- 成(なる) 婚姻旅行入學移轉種蒔に吉、訴訟に凶。
- 納(おさん) 五穀財物を取入るゝに吉、旅行葬式に凶。
- 開(ひらく) 萬事に吉、但し葬式不淨の事に凶。
- 閉(とづ) 萬事に避くべし、但し墓を立つるの吉。

### 本命的殺の早繰

▼本命的殺 は人生の大凶方であります。假りにも誤つて犯すことがあれば殃害忽ち來つて如何ともすることが出来ません。殊に本命的殺の厭ふべきものは普請、造作、婚姻、開店、旅行等に用ひてはなりません。然し本命のみは月の吉星の助けもあれば普通の事は宜し。圖中自分の年齢のある方は本命で、その向ふの所は的殺であります。そして自分の年が中央にある時は的殺も中央となります。





▼五黄殺 五黄星の居る方位を云ふのであります。この五黄殺は必ず暗剣殺と向ひ合つて居ます。例へば北が暗剣殺の年、月なれば必ず南が五黄殺であります。

▼歳破 その年の支の方位と向ひ合ふ方を云ふ。例へば午年なれば其の向ひの子の方が歳破であります。

▼月破 その月の支の方位と向ひ合ふ方を云ひます。

▼暗剣殺 年月ともに其中央に居る星の定位を暗剣殺と云ひます。例へば一白中宮の年なれば一白は元來北が定位ゆる此の年は北の方暗剣殺であります。又月とても同じことで、二黒中宮の月は未申が月の暗剣殺であります。

以上は六大凶殺と云つて最も恐るべき方位ですが、その内にも暗剣殺、五黄殺は最も凶であります。普請、動土、移轉、旅行、伐木、修繕、嫁取り婿取り其他萬事に注意して犯さぬ様するが宜しい。

### 吉日の説明

天赦日 春戊寅日、夏甲午日、秋戊申日、冬甲子日、この日は一ケ年中に五六度よりなき吉日にて諸災を除くゆる、何事に用ひても吉であります。

神吉日 神事、祭禮、遷宮、造社、願掛け、願解き等に用ひて大吉の日であります。  
 大明日 普請、造作、移轉、旅行、婚姻、入學、就職、召使、雇入、裁衣又は着初め

等に吉であります。然し他の悪日と逢ふときは見合すが宜しい。

天徳日 この日は移轉、普請、婚姻甚他に吉であります。

歳徳日 この日は天徳日と同じく吉であります。

月徳日 この日は婦人の事に用ゆるに吉であります。

天恩日 この日は他の吉日と合すれば最吉であります。

母倉日 この日は總て物事始むるに吉であります。

天福日 この日は萬事始めて取掛るに吉であります。

地福日 この日は物事取入れ納むるに吉であります。

### 新しい占ひ方

新しい占ひ方として界女の相性を観る方法は、人が胎内に宿つてから出るまでの期間を數で割出し、その期間が何の干支に當るかを調べて、その相生するものが最も良

い男女の相性なのであります。この人が胎内にある期間を調べる方法は、胎測法と云つて、古くから支那で運勢を觀る方法として行はれてゐたものでありまして、男女の相性を觀る一番確實なのは、双方の生年月日によつて觀るのがよいのであります。それでは一般の方には解ることが出来ませんので、次に示す如く年廻りにより、或は年齢の差により、干支の配合によつて相性が解るやうにしたものであります。

### 結婚のよい年齢と悪い年齢

幸福な結婚生活をするためには、第一に年廻りに注意せねばなりません。年廻りの悪い年に結婚しますと、どんなにお互に注意し、努力しましても何時しか相反するやうになるものであります。それに、その人の持つ天分と云ふものも、大に關係するものであります。よい天分即ち良人運、妻運のよい人なら、自然によい良人や貞淑な妻を授かるもので、天分の薄い人なら、どんなに選りに選つて迎へた妻なり、嫁いだ良人であつても、その結果はいつも不縁で、何度も夫婦別れをして、良人運、妻



夫婦なのであります。殊に七つ違ひ、四つ違ひが良いのであります。

然し、この場合も前の年廻りのよい年齢に結婚するやうにせねばなりません。

### 生れ月で相性を知る

よく丙午の女は、良人を殺すといふことが一般に言はれて居りますが、これは全くの迷信に過ぎません。丙午の午は、十二支の子から數へて七つ目に當りますが、この七つ目は十二支の判断法による七つ目で、それには非常によい意味もありますが、悪い意味に當て箴めて、斯くは言ひふらされたものであります。

併し、生れ年月によい星があれば、たとへ丙午の生れの者でも、立派な婦徳を備へた妻として、圓滿な家庭生活をすることが出来るのであります。これと反對に生れた年月日の星に悪い星があれば、丙午生れの人でなくとも良人縁、子供縁がなくて、何度結婚しても不遇であつたり、子供縁が無くて晩年を苦しむやうにもなるのであります。

す。

で、本當の夫婦の相性を観るには、前述の方法以外に更に夫婦の生年月日に悪い星があるか無いかをも調べねばなりません。これを簡單に知るには、生れた年月日のうちに、辰加戌、丑の星のあるものは多くはやもめ暮しをする寡孤性の人であります。殊に女の生れた月日に辰戌の星がありますと、良人に生別、死別するか、何度もう良人を代へるといふ風で、晩年はどうしても淋しく暮すやうになります。また辰々の生れの人、男ならば妻を何度も代へるか、または妻を苦しめるといふ性質であり、女ならば嫉妬深く、喧ましい人であります。よし教養ある人であつて斯る星の下に生れたものは、どうしても嚴重なる一夫一婦を守つてゆくことが出来ず、従つて心中淋しい人であります。

また生れた月日の干支を調べて見て、全部それが陽の生れの人でありましたら、女なら良人の縁の遠い人であり、また男なら妻を虐める人でありますので、従つて夫婦

縁なく、相性は成立たぬことになります。

## 十二宮に依る運氣

### ▽子年生れ

物事に比較的器用で人によく取入ります。併し義理の念に薄く、また虚榮心が高き伶俐で且つ悪氣のない性質であります。何處か落着がなく、つまらぬ事で名を落したりします。故に常に慎重の態度をとることを忘れなければ出世します。併し男はどうかすると妻君に頭の上らぬ人が多い。

相性は寅卯申酉が吉で、巳午亥丑辰未戌は凶であります。

### ▽丑年生れ

苦勞性で何事も遠慮勝ち、曲つた事や表面を飾ることを嫌ひ、そして我慢強い、然しそれだけ頑固なところもあり、餘り口先へ出さないで一人よくしてゐる。そ

れが爲め只もするといぢけた心になり易い。もつと晴れやかな心持になり、遠慮ばかりしてゐないで大に爲ねばなりません。

相性は申酉丑辰巳午未戌が吉、子亥寅卯は凶であります。

### ▽寅年生れ

運氣の強い人、心猛く負け嫌ひ、而も比較的淡泊でよく上を敬ひ、下に對しては憐みの念厚く、人の頭目になる性質であります。餘りに遣り過ぎて人に憎まれたり怨まれたりすることがあります。宗教心など深い方だが婦女に對する貞操觀念を輕んずるの甚だ宜くありません。

相性は巳午寅卯子亥は吉、丑辰未戌申酉は凶であります。

### ▽卯年生れ

性質は穩かですが、思慮決斷に乏しく、爲めに人に輕んせらるゝ風があります。然し愛嬌がありますから人に愛せられます。骨惜しみをすることゝ素行を改むること、

飲酒色慾などを慎み、慎重な態度を以て事に當らば、成功は疑ひありません。  
相性は巳午寅卯子亥は吉、丑辰未戌申酉は凶であります。

▽辰年生れ

剛慢な性質、つまらぬ事にまで無理をしても勝たうとする、何事もひた押しで行かうといふ、されば周囲を顧みるの遠なくて、遂失敗し或は心にもなき悪名を蒙ることになります。元來この性の人は器が大きいゆえ、今少し氣を和げ、前後をよく察して事に當らばよく成功します。

相性は申酉丑辰己午未戌は吉、子亥寅卯は凶であります。

▽申年生れ

却々剛情ではありますが、人に愛せられる性質で、殊によく目上の人に取り立てられる。眼先がよく利いて又腹の中が竹を割つたやうな薩ばりしてゐます。至つて陽氣ですが、度量は狭い。それが爲め稍もすれば人を選び好みします。人の世話もよくす

るが兎角長續きはしません。何事にも今少しねばり強くするのが肝要です。

相性は子丑亥辰未戌は吉、寅卯己午酉は凶であります。

▽酉年生れ

世話好きですから自分の事より人の事で苦勞します。細かい所まで氣がつけど、自分を忘れて名譽に憧るゝ癖あり、心常に落着かず、あれかこれかと屢々望みが變りますから、金錢などよく手に入れども直ぐ出てしまふ。世話好きといふ美點は宜し、何事も慎みの態度で事に當らば後世に名をなさん。又色情を注意。

相性は子亥丑辰未戌は吉、寅卯己午申は凶であります。

▽戌年生れ

心常に穩かでなく平常も不満多くて晴々しいといふことが尠い、それが爲め意外の災害を招いて身を亡すことあり、又思つた事をすらくと打明けずと口と行ひとが屢屢一致しないゆえ、人にも信せられず、又自らも容易に人を信じません。もツと個性

を離れ自我を離れ、自他をよく理解して事をなさば成功させよう。

相性は甲酉丑辰未戌巳午は吉、子亥寅卯は凶です。

▽亥年生れ

物質的には物慾恬淡であります。自我の念強く、何事も自分を中心として事を爲さんとする。この點ある程度までは獨立獨行の氣となりて宜けれども、人との相談を好まざるゆゑ失敗することあり、義侠心強けれども憤激すれば容易におさまらず、元來は人の頭に立つ性の人であります。

相性は寅卯申酉は吉、巳午子亥丑辰未戌は凶であります。

### 媒酌人と云ふものは

媒酌人は謂ゆる結ぶの神と云ふくらゐで、兩人一生の大事を司る重い役目であります。そして媒酌人あつて縁談は進行し、巧く纏めてゆくものでありますから、劈頭

に媒酌人の心得を述べておきませう。世に仲人口と一口に言ひますが、これは悪いことも總て善い事のやうに言ひ、たゞ結婚させてしまへば、それで媒酌の責任は済んだものと思ひ、何でも彼でも押しつけてしまふやうな人の事を言ふものであります。少くとも兩人を満足に結婚させて、圓滿な家庭生活をさせて行かうとするには、かく無責任であつてはなりません。婿方嫁方とも、媒酌人の言葉は何人の言葉よりも信するものでありますから、その言葉は、いつも兩人の幸福のための眞實の言葉であり、誠意ある言葉でなければなりません。従つて媒酌人は花婿、花嫁兩人の性格、趣味、體格、學力等に就て能く知らねばならず、そして兩人が結婚したらば、その後々までの責任を負ふといふくらゐの責任感がなければなりません。従つて媒酌人たるものは兩人にとつての一家の指導者であり、また相談相手でなければなりません。從來の媒酌人は、結婚式が済んでしまへば、あとは何の用もないやうであります。それは依頼する方も依頼された方も、結婚の儀式に於ける一人の役人として、役目を終れば宜

いとしか考へてゐないからであります。媒酌人は右に述べたやうな考へを持つて、見合から結納、結婚式、披露と一切の司令官として萬事を行つて行かねばなりません。従つて結婚式に於ける儀式や禮法に就て、よく知らねばならないのであります。結納品とか支度の程度も、身分不相應の事のないやう監督もし、且つ相談にも與つて、婚禮の日時、人數、饗應等萬端を兩家の間に立つてよく交渉し當日に至つてまごついたり、失敗することのないやう、よく注意して取計ふべきであります。本式は双方より一組づゝの媒酌人を立てたものでありますが、近來は一組の媒酌人が總てを取りなす様であります。言ふ迄もなく媒酌人たる者は、夫婦揃つて健在で、圓滿な家庭の方でなければなりません。

## 結婚式に就ての心得

### 見合のこと

結婚に成功すれば此上もない人生の幸福を與へられますが、若し失敗に終れば、生涯を人知れの苦痛と悩みとに過さねばならぬことになります。随つて夫たり妻たるものを選ぶ場合には慎重の上にも慎重の注意をして、充分に對手を調査し、對手を知らねばなりません。

結婚は當人同志の理解が一番大切である以上は、お互ひに對手をよく理解するため機會を得ることが必要であります。それには媒酌人の家などに、それとなく双方を招き、紹介して、色々な話をして半日を楽しく過させるとか、或は散歩なり觀劇なりを共にさせて、お互ひに接近させるといふ事は誠に都合の宜いものであります。然し斯ういふ見合の方法は、家庭によりまた境遇とか、所に依つては行はれ得ないものがあります。さうすると矢張り從來の見合の形式によるものであります。

從來の見合は可也大袈裟なものでありますから、若し見合をした上で、男子の方から斷られるやうなことがありましたら、それこそ良家の處女として少からず羞耻を感



じ、前途を悲観するやうにもなりませんから、見合の前に充分の調査をすることが肝要であり、そして先づ大體に於て宜からうと思つた上で、本式の見合をした方が宜しいのであります。従つて昔から行はれてゐる下見といふことも大切であります。これは本式の見合をする以前に、親戚の家なり、劇場なり、音樂會なり、或は學校の往還などに容貌舉動などを能く見ておくことであります。

從來一般に行はれてをる見合の式は、双方の縁談を進めた人、謂ゆる橋渡しの人が兩家に相談して、まづ吉日を選び、次に適當な場所を定め、双方とも父母若くは近親の者が附添ひ、橋渡しの人も同行して行ふのであります。すべて此の場合橋渡しの男は婿方に附添ひ、女ならば嫁方に附添ふものであります。

まづ婿の方が嫁の家に行くか、或は然るべき座敷を借りて見合することになります。婿方には父親または親戚の者が附添ひ、嫁方には母親などが附添ひます。いづれも別々の座敷にあつて、婿さんの方が座したところへ、嫁となる當人が茶菓を運びな

として、その間に双方とも容貌なり舉動なりを見るのであります。その時嫁方の母親なり附添人は、物蔭より隠れ見をするのであります。この隠れ見、或は脇視をしますのには、その同時同行しない兄弟なり近親なりが、當人の通行する途中で、あまり目立たない姿で、當人の容貌動作などを隠れて見ることもあります。然し、今日では當人が茶菓を持つて出て、嫁方の母親もその席に列して、そこで皆なで四方山の話をして婿嫁の當人同志さへも話をするやうにし、隠れ見或は脇見などは行はれないやうになりました。

(注意) この席上では日本茶を出すことを、茶にする、茶化すなどと縁起を擔いで一般に忌みますので、櫻湯、昆布湯などを出す習慣であります。尙この見合の席には、當人に紛らはしい年齢の者を附添人として連れて行くことは止すやうにせねば可けません。それが爲めに嫁なり婿なり、間違つて後日に問題を惹起すことが往々あります。

## 結納

見合も済んで双方が承諾したとなりましたら、双方が相談の上で吉日を選び、結納の式を行ひます。一體この結納といふことは、俗にこれを頼みとも、また常陸帯の祝儀とも云ひます。昔は言納と云つたもので、それが何時からか結納といふ事になつてしまひました。いづれにしても其の意味は、たとひ如何なる事情があつても再び變更はしませんと云ふ最も重き儀式であります。結納の形式は、上古婿の方から先づ妻の家に行つて婚姻した時分には、寧ろ妻の親即ち舅から婿に物實を贈つたやうであります。徳川幕府時代から、身分のある人は却つて婿の方から、妻を貰ふといふ約束の印に、品物を嫁女へ贈るやうになりました。然し、嫁ぐ方の縁女からは、婿の方へは何も贈りませんが、いよく興入の當日になつて、婿その他の家人へ、それ／＼土産物を持参して贈呈するやうになつたのであります。今も古式を守る人は、左様にする

事もあります。先づ大抵は普通の例にならつて、結納の品物を相互に取交はすのであります。まづ婿の方より、媒酌人または適當な人を以て結納品を贈りますと、舅の方はこれを受けて、更に返禮の使者を遣はし、双方相互に固い約束が結ばれるのであります。その贈り方、受け方は、本式には婿方からまづ使者を以て結納品を贈りますと、嫁方からも更めて返禮の使者を遣はすものであります。當今ではこれを簡略にして婿の方より使者を以て結納品を贈りますと、舅の方よりは唯その受取書を送るのみで、別に返禮の使者を遣はさないやうであります。

(注意) この使者は上流の家ならば家令とか執事とかいふ人が勤めるので、受ける方でも丁寧に取扱はねばなりません。また普通の家では媒酌人に依頼するのが多くなりしました。

## 結納の品

結納に用ひる物品は、慣例によりまして男女相互の禮服とか、帯とかいふものに鯛酒樽、長熨斗、錫、昆布、白髪(苧)末廣、扇子、真綿などを用ひます。或はまた全然品物を用ひないで、金子を目録として交換する方法が最も多く行はれて居ります。即ち婿方から小袖料または帯代として金若干圓を贈り、嫁方からは袴料として其の半額或は一割位を贈るやうであります。そして金子の目録に、更に品物の目録書(多くは五荷五種の目録)を添へたり、または熨斗を加へたりもします。

(注意) 婿方から贈る金圓は、普通三十圓、五十圓から百圓、中流ですと二百圓位まで贈ります。

この結納品は、往昔上流の武家間に於ては、婿への太刀は必ず無くてはならぬものでありましたが、現今では太刀の代りに西洋風を加味して、指環を交換するやうになりました。

結納の品にも、身分に應じて色々ありますが、すべて分相應の品を贈れば宜しい。

### 古式による一二の例は、

三重七種七荷……練絹小袖一、板の物一、緒笥一、唐織一、緒笥一、幸菱白綾一、

以上三重に権者の七種七荷を添へます。

二重五種五荷……練絹小袖一、板の物一、緒笥一、幸菱白綾一、

以上二重に五種五荷を添へます。

三種一荷……白小袖と色小袖との一重に三種一荷を添へます。

一荷一荷……小袖一枚に樽と肴を一種一荷添へます。

右の何荷とは酒樽の數で、何種とは肴の種類であります。肴は昆布、錫、鹽鯛、申鮑、鯉節、鯉、鳥等であります。尚ほ右の三種三荷のうちで白小袖とあるのは、裏表とも白の小袖で、色小袖は表は紅で裏は何色でも宜いのであります。一種一荷の小袖は何でも隨意ですが、成るべくは白紬子などを選ぶのが宜しい。こゝに言ふ小袖及びその他の衣服でも、一重と云ひますけれども、その實は反物であつて、板の物とは板を心にして巻いた反物であります。

以上述べたものは古式に依つたものでありますが、現今はもつと簡略になつて、次

の様であります。

上の部（七種）……………小袖、帯、昆布、鯛、鯛、末廣、樽。

中の部（五種）……………帯、昆布、鯛、鯛、樽。

下の部（三種）……………帯、昆布、樽。

當今は式を略して物品を用ひるにも、白でなくとも染絹、小紋縮緬、絹の縞の類に紅絹真綿を添へて小袖の料とし、或はその實物を用ひずに、絹布料反物料と書いた金封にし、また樽肴も同様金子を紙包にし、水引をかけ、片木に載せます。但し帯地一筋添へるのは本式ではありませんが、二筋添へるのは忌みません。

以上の小袖帯地などは、杉原紙を二枚重ねたもので包み、金銀の水引または紅白の水引で飾つて、樽の外は何れも白木の足附臺に据え、目錄を添へて置くものであります。

男への進物は、上の部は袴地一卷、雉子一双、樽一荷で、中の部は雉子を鯛または

鯛に替へるか、或は省きます。下の部は末廣一對、樽一荷であります。また袴地の代りに小袖地や羽織地にしたり、または袴地に更にそれを添へることもあります。姑への進物は、上の部は真綿一折、鯉一折、樽一荷、中の部は鯉を鯛に替へても、または白髪（苧）一折にしても宜しい。下の部は白髪一折、樽一荷であります。また卷衣または絹地の反物に結綿か樽肴を添へて贈つてもよく、尙ほ略せば反物と熨斗 鮑包との二つを臺に載せて贈つてもよいのであります。

現今は婿方へ返禮として、男より贈ることは餘りなくなりましたが、若し之れを贈るとすると小袖一重、羽織袴一具、末廣一對、鯉、鯛、昆布、鯛、樽などであります。また略式には、婿方よりの結納相當の返禮に當る進物をすれば宜しい。さうすれば婿方の兩親からも嫁方の舅姑へも、板の物、織物、紙、樽などを進物として贈り、更に婿よりは嫁方の附人への引出ものとして巻衣、鼻紙などを贈るのです。尙ほ親族への進物は、男へは末廣一對、女へは白髪一折を贈ります。

(注意) 右は何れも装飾を加へ、紙に包み、臺に載せてそれごとく人別に目録を添へて贈るのであります。

### 結納目録認め方

結納の目録を認める紙は、現今では大奉書大杉原を用ひて居りますが、これを本式に申しますと、婿より舅姑へ、また縁女へのは小高檀紙、中奉書、小奉書を用ひ、舅姑より婿への目録には大高檀紙、大奉書を用ひます。目録は二枚重ねにするものですが、これは昔の色目重ねの餘波であります。然し現今ではまづ大抵は、白紙ばかりを二枚重ねにしたものが普通であります。

用紙は二枚重ねて横に巻いて、それを縦に六つ半に巻きます。實際は六つ半に折るのですが、折ると言ふ言葉を忌みますので巻くと云ふのであります。今六つ半に折つた二つの分を兩端とし、二つ半分を中部とすれば、兩端より中部の方が廣くなつてゐ

ます。これを豎目録と云ひます。

すべて吉事には淡いと云ふことを忌みますから、目録を認めるにも、淡い墨で書かぬやう、墨はよく磨つて極めて濃いので書きます。

目録に書く文字は總て楷書が本式であります。女子へのは特に假名書にすることもあります。現今普通用ひられてゐますのに、柳樽を家内喜多留、鯉節を勝男武士、鰯を壽留女、昆布を子産婦などと書きますのは、萬葉假名を應用して、縁喜のよい目

目録	一金何圓也	小袖料
候也	以上	右之幾久しく目出度受納下され度
嫁の親の氏名殿	年月日	婿の親の氏名

式書の場合るふ用を子金

目録	一、小袖	何重
	一、樽	何荷
	一、肴	何種
	以上	右之幾久敷御受納可被下候
嫁の親の氏名殿	年月日	婿の親の氏名

式書は行に般一通普

出度い文字を使つてゐるのであります。品書の順序は小袖、板の物、織物を書いて次に鳥、魚、樽と書き、如何程品数が多くとも表一面に書いて、裏面へ奥書や姓名は廻るとも、品名を書かぬやうにせねばなりません。また近來行はれるやうに、全部金子を以て済ます場合には書式の如き書方をし、これに指環を添へる場合には、小袖の次に指環一箇と書きます。

目録	金	何圓
白綸子	何卷	
緋縮緬	何卷	
紅梅	何疋	
綿	何把	
熨斗	何把	
錫	何連	
昆布	何束	
鯉節	何本	
鯛	何折	
樽	何荷	
年月日以上		

以上の如く書き終りましたら、これを疊んで上を美濃紙で包み、上下を裏に折り返しておきます。そして上の方へ上の字を一字書き、水引は掛けません  
 (注意) 近頃はすつと簡略にした書式が印刷物にして紙店とか乾物屋などに賣つて居りますから至極

便利であります。

### 親類書認め方

親類書	祖母	倉野さきみ
	父	倉野興市
	母	倉野はな
	兄	倉野太郎
	兄妻	さく子
	妹	上田りん
	妹夫	芳男
	弟	鈴木 潔
	弟妻	英子
右之通り		倉野林藏

結納品目録の外に、更に新類書を添へることがあります。これは兩家とも取交はすのが法であります。用紙は小奉書などで上包は美濃紙にし、すべて目録の認め方のやうな注意でしますこの親類書には父母、祖父母、兄弟姉妹、父母の兄弟姉妹に至るまで親族の關係から住所、氏名、身分、職業等を成るべく細かに認めるものであります。また略して父母、祖父母、兄弟姉妹の氏名だけで、住所や身分職業を略することもあります。氏名を順に書き終りましたら、右之通りとだけ書き、次に婿の氏名を書きだけで、宛名も年月日も書きません。嫁の場合には、

婿の氏名のところに嫁の氏名を書けば宜いのであります。

### 結納を受けるに就て

結納を持参する使者を待ち受けますのは、使者が二人ならば、受取る方も二人の受取人が必要であります。また略儀で使者が一人ならば、受取る方も一人で宜しい。この受取人は進物の来る前に、それを受取るについての役を定め、茶煙草盆の給仕の者使者への饗應役、勝手元で人足などへの馳走役などが要るのであります。玄關なども不都合のないやう、門の内外も掃き清めておきます。使者へ饗應する御馳走の品は、餅に結び昆布の雑煮、蛤の吸物、数の子、巻鯛、午芳の組重、鯛に蒲鉾の臺、海老の臺に酒、これが本式であります。また幸領以下の人々へも酒を出して饗應します。この饗應は兩家とも餘り甲乙のないやうに、前以て打合せておくやうにします。

### 結納使者の心得

結納品を持参する使者は、成るべく淡い色の衣服を用ひぬやう、濃い色のものを着用することでありませう。そして心得おくべきことは進物の受渡しのこと、挨拶の仕方忌み言葉を用ひぬやうにせねばなりません。

結納を物品料で贈るときは、それを廣蓋に載せて風呂敷に包み、供の者に持たせるか使者自身で持つて行きます。また物品で贈るときには、その物品をそれごとく取調へ小さなものは臺に載せたまゝ長櫃に入れ、大きなもの、魚、鳥、樽などは、進めるやうにしたまゝ釣臺に載せ、木綿などの覆布を被けます。この覆布は無地の地色に家の定紋を染め抜いたものか、子持筋を入れるか、普通には唐草模様にしたものを用ひます。また雨天の際は桐油をかけます。また目録は必ず臺に据ゑるか、片木に載せるものであります。

この結納品を持参する使者の人数は、現今では多く物品料で済ませますので、使者自身で持つて行きますが、物品で贈るときには、先づ提灯持、次に媒酌人、次に使者次に提灯持二人、それから釣臺を擔つた者、最後に幸領が附いて行くのが本式であります。この使者は身分のよき者を選び、二名が本式ですが略して一名で済ませますこともあり、また媒酌人に依頼することもあります。

### 贈り方と受け方

結納を持参する使者は、長熨斗と目録、末廣、金封、親類書を長三方に載せて嫁方に持つて参ります。受ける方の嫁方では、婿方へ贈るべき結納品を床の間へ飾つておきます。使者はまづ一應の挨拶をしてから、婿方からの結納を主人に渡します。その時には嫁女も一緒に御禮に出ます。その時の挨拶は、忌み言葉を用ひないやうに注意し、「幾久しく」と云ふことを後に附けます。それから媒酌人には相當な饗應をし

なければなりません。けれども結納は一日で終るべきものでありますから、一人の媒酌人のときは餘り酒を出さないこととあります。饗應を受けた媒酌人は、歸るとき受書を受取り、一應の挨拶をしてから、改めて嫁方よりの結納品を預り、婿方へ歸るのであります。その時は總て送り出すことなしであります。

これは現今一般に行はれてゐる略式の贈り方と受け方で、媒酌人一人で済ましてしまひますが、媒酌人が双方から二人づゝ出るときには、婿方からの結納品を收めますと、嫁方の方ではその日のうちに受書を持つて婿方にまわります。これも送り出すことなしで、殊に其の時用ゐるお茶は、茶を出さずに白湯か櫻湯を用ひます。

尙ほ古式に依る正式の受け渡し方は、一人は本使者、一人は副使者となつて進物を嫁方に運ばせ、先方に到れば副使者が進物を人夫の主立つたものに命じて覺書に引合せ、間違のないやうに目録の順に一々式臺に並べさすのであります。その間に本使者は案内に伴はれて座敷に通じ、副使者は舅小姑への目録を右手に、姑への目録を左



手に持つて座敷に通る、本使者の次に控へます。本使者は嫁への目録を嫁方の受取人に渡し、「何某（婿の父の名）の申しますには、本日は吉日につき結納の御祝儀として何某（婿の名）より御息女様へ目録の通り進上仕ります。これは御舅様、これはお姑様、これは何某様（と順に目録を副使者より取つて渡し）目録の委細はこの通りにございます、自分の覺えに認めて参つたのであります。御引合せ下すつて御披露御頼み申します」と云ふ意味の口上を言ふのであります。この覺書といふのは紙を堅に接いで、進物の數を委しく書き記したもので、これは本使者の覺えとして先方の受取人に渡すものであります。品數が少くても多くても順に書けば宜いのであります。

### 使者の饗應の挨拶

進物を受けたる嫁方の主人は、使者に面會して挨拶を述べるのであります。即ち「今日の吉日に娘方へ結納の御祝儀下され、まためい〜へも御丁寧なる御進物下さ

れ、悦ばしく祝ひ納めます」と云ふ意味の言葉を述べます。また嫁方よりの使者には、婿自身が使者に會つて、「舅殿より結納の御祝儀下され、まためい〜へも云々と前と同様な意味の言葉を述べるのであります。そして盃を與へますのですが、その挨拶の前に結納品の受取人は、進物目録の披露をします、これは使者に對する作法であります。それから使者に受取書を渡す順序であります。

使者への饗應はそれからですが、これは正式には三献の盃事があり、次に用意しておいた二汁五菜の料理を出すのですが、また略して吸物肴二種ぐらゐで酒を侷め、また宰領以下人夫等へも相當の饗應をします。然し現今では略式の上にも略して馳走料として包金に半紙を女夫紙にして水引をかけ添へて渡すのであります。また婿嫁兩家に於ては、前以て双方が打合せておき、使者へ相當の引出物料として金包にて遣はします。

また媒酌人に對しては、結納を送る當日に兩家とも時間を定めて招き、饗應を致し

ます。まづ婿方では晝間に於てし、嫁方へ持つて行く結納の品物を披露して後、丁寧  
にすれば三汁七菜くらゐの本膳で饗應するのであります。また嫁の方では夜分に招待  
して、受けたる結納の品を披露して後、同じく饗應するのであります。従つて媒酌人も  
双方へ相當の祝儀の進物をしなければなりません。その品は魚、鳥、樽などでありま  
す。結納を目出度く済ました翌日には、兩家とも媒酌人の家に行つて、「お蔭をもち  
まして滞りなく相済みました」と挨拶に行くのであります。

### 結納の内披露

結納の内披露とは嫁方で受取つた結納の品々を取揃へて飾り、まづ第一に媒酌人夫婦  
を初め一家一門及び親しい朋友などを招待し、膳部を調べ、祝事をするのでありま  
す。また此の時に婚禮の次第などを談合してもよいのであります。

これは婿嫁双方とも進物を見せ、進物を贈つてから饗應するのでありますが、双方

同時にならぬやうに一方が午前なら一方は午後と云つた風に時刻を定めておいて、媒  
酌人を招待するやうにせねばなりません。この内披露の宴は、結納品の使者を饗應す  
るよりも、もつと鄭重にすべきであります。

### 花嫁の調度品

花嫁の調度品は、身分相應に調ふべきものでありまして、一々その品目を挙げる譯  
には行きませんが、せひ調べたいものは箆筒、鏡臺、針箱、寢具、食器、日用品等  
であります。あとは結婚してから二人で足りないものは漸次補つて行きますやうに、  
出来るならば若干の金子を用意して行くべきであります。着物なども當座の外、出着  
訪問着、平常着を用意し、もし調度品を充分調べ得られる資力ある家庭の方でありま  
しても、徒らに箆筒幾棹、長持何棹と云ふやうなことを誇ることもなく、それだけの金  
子を持つて行き、何かの必要が起つた場合には、それを以て用に當てるやうにしたい

ものであります。

## 荷物送り

嫁入りの荷物を送るのは、双方が申し合せて婚禮の前日か、その前日か、都合の好い日を選んで送るのであります。當今は多く夜分に送るやうでありますけれども、これは朝送るのが禮法に適つて居ります。荷物は大きなものは釣臺に積み、小さいものは長持、行李、トランク等に入れます。荷物の数は十一荷、九荷、七荷といふ風に奇數を送ります。そして琴と衣桁は何荷といふ中に加はるものであります。

荷物を送るときは、媒酌人が嫁の家に行きますと、嫁の家では酒肴を出して饗應します。媒酌人はそこで荷物目録、荷物明細帳、鍵袋の三種を受取つて荷物の先に進みます。荷物の順は第一に庖厨用具、第二に衣類と裁縫用具、第三に座敷用具といふのが正式であります。當時は算笥が第一で長持が第二になつてをります。例へば七荷

とすれば第一に算笥、第二に長持、第三に琴、第四に衣桁、第五に屏風、第六に挾箱第七に雜長持といふ順序になります。大概荷物目録に記載の順序に依れば宜しいのであります。

荷物の幸領は媒酌人と荷物の間に付き、途中警衛の任に當ります。尚ほ荷物一荷毎に家の定紋附の弓張提灯を點して、下僕が一人か二人づゝ附添つて行きます。婿方に着きましたら、荷物を靜かに運び、使者は嫁の親よりの口上を述べて荷物と目録を引合せ、目録と荷物明細帳、鍵袋を婿の兩親か、または婿に渡し受取書を受取ります。この荷物送りの使者は大抵媒酌人が勤めるのですが、別に荷物送りの使者があらざらば、媒酌人は先に婿の家に行つて待ちうけるものであります。

荷物を受取つた婿方では、使者の勞を謝し、媒酌人は勿論使者、幸領、人足なども酒肴を出して饗應します。また唯酒肴料として水引をかけ熨斗を附けた金封に、その上に熨斗餅を大きく切つて、二片づゝ紙に包み、水引をかけて與へるのであります。

この熨斗餅を與へるのは、打合せ餅配分の遺風ださうであります。尙ほ荷物を擔ふ人足は、握るところを半紙で巻き、水引で括つた青竹の息杖を用ひますが、この息杖は歸りがけに、婿の門先で皆な折つて捨てるもので、これは再びこの杖を使ふことがあつてはならぬと云ふ、縁喜を祝うたものであります。

以上は古式に依る荷物送りの仕方ですが、當今では媒酌人が附添つた車なり自動車なりで送るやうになり、極めて簡単に済ましてしまひます。然し、如何に簡単に済ます場合でありましても、荷物送りの使者及び關係人に對しては、分相應にそれぞれ酒肴料を遣はさねばなりません。

右の如く送られた荷物は、婿方の嫁女の居間に裝飾すべきものと、婚禮當日に入用の品と當分藏ひおくべき品など仕分けをして、それごと取りしたゝめておかねばなりません。

## 花婿の服装

結婚式日に於ける花婿の服装は、大禮服、燕尾服または紋附羽織袴が用ひられます。尙ほ略してフロックコート、モーニングコートも用ひられます。近來は羽織袴でなければモーニングコートで式に臨む者が多くなりました。モーニングコートですとスポンは縞であります。そしてカラーはシングルで白の蝶結びのネクタイをかけます。尙ほワイシャツは白色で、手袋も白色のを用ひます。靴は成るべく黒色のエナメルを塗つた釦どめのものを用ひ、帽子は多くは山高を冠るやうですが、略してソフトを冠る人もあります。羽織袴にしますと、冬は縞物に羽二重の五つ紋、白紐の羽織を着、仙臺平の袴、白足袋、草履となります。夏ですと縞、盛夏ですと白の上布に羽織を着ます。現今でも最高貴の御方は、舊儀のまゝに衣冠束帯を召されます。

## 花嫁の服装

花嫁の服装は、古式に依れば桂袴の次には掻取（補襦）で、色は全然白のものでしたが、近頃はこの掻取や振袖は着ないやうになりました。そして只今では多く詰袖にし、地色も白でなく黒が主であります。尤も夏は變り色も用ひます。模様は鳳凰とか松竹梅などの目出度いものをあしらつたのが多く、下は白の重ねもありともむくもありません。帯は西陣か襦珍の丸帯、宮迫、扇子等が主なるもので、髪は高髷でも島田でも束髪でも宜しいのですが、一般には島田に結ひます。束髪の場合には、白い鶴の羽毛を挿します。日本髪ですとそれに笄、角かくしを用ひます。

## 式日嫁方の準備

前以て婿方より花嫁出迎ひの者が來た時の馳走役を定めておき、茶菓子で饗應する

用意をしておくものであります。また萬事故實に詳しい夫婦者を選んで婿方に行き、部屋飾りをさせます。また嫁より夫や両親兄弟への進物の用意もせねばなりません。またその夜に用ひる提灯は嫁の家の定紋であります。

## 式に用ひる品々

▼島臺 島臺は盃をおく臺であります。これを置物や飾物のやうに思つてゐられる方も尠くありません。盃臺には洲濱形、雲形の臺がありますが、多く洲濱臺を用ひます。この臺の上に松竹梅を、實物または造花で華やかに飾り、尉と姥と鶴龜を剝物（大根、甘藷などで人形などを作つた料理）であしらひ、謂ゆる蓬萊島を象つたものであります。

▼押臺 押臺は肴を盛る臺のことで、嫁の肴臺である富貴臺、婿の肴臺である押臺、待女郎の肴臺である控臺などがあります。富貴臺は白木の三方に、本式には露の葉を



(島 臺)

(島臺の圖)

盛り、時候の花をあしらふこともあります。押臺は、白木の三方の上に稻の穂を盛るのが本式ですが、その時季の草花を以て代用することもあります。控臺は白木の三方に芋の子を盛るのが本式ですが、何か目出度い草花をあしらひ、または代用することもあります。

り(五寸切のことで、小さな鯉を素干にしたものを細かく刻み、膾として食べるもの) 赤は鯉節、黒は海參(海鼠の腸を去り、これを茹で、日に乾かしたものでホシコ又は

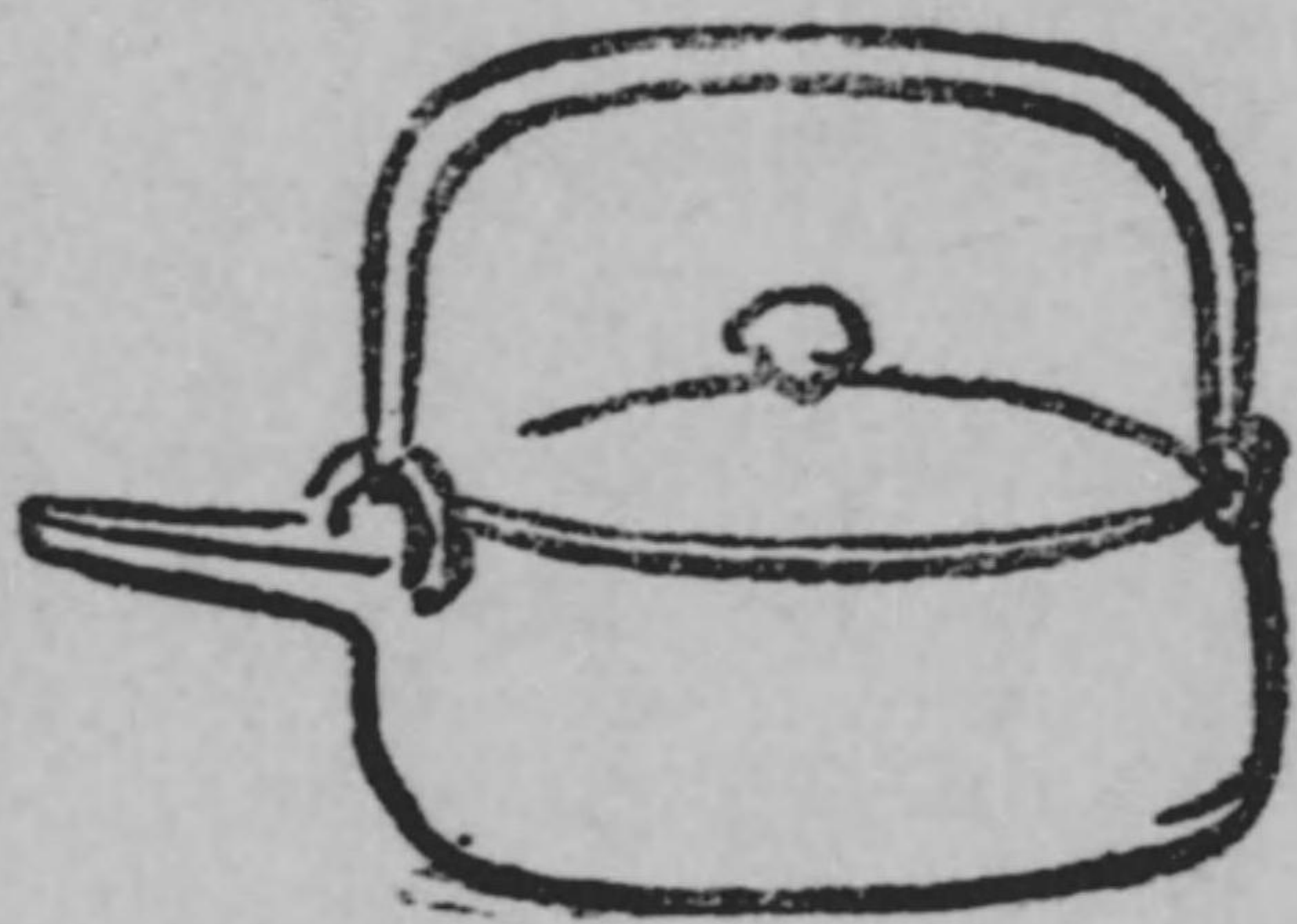
▼手掛 これは祝儀の時に第一番に据ゑるものでありまして、古式には白、赤、黒、青、黄の五色を用ひます。白には干ごんぎ

カラコともいふ) 青は鮫、黄は鯛で、いづれも細く削つて盛つたものでありますが、當時は巻鯛、蒲鉾、焼鳥、いりこ、結炭斗、串鮑を盛つて、檜葉に金銀の露をうつて挿すことになつてゐます。臺は高さ一尺二寸の六角形であります。下へは勿論のことと二重臺も共に紙を敷きます。

▼置鳥置鯉 式日に神前に供へる供物でありまして、野の物と川の物とを供へるのですから、野の鳥と川の魚とを用ひるのです。その鳥は雉子で、魚は鯉です。時候に依り實物を手に入れ難いときには、剝製でも木彫に彩色したもので、または鳥魚の肉を土器に盛つて供へても宜しいものであります。この供へやうは、向つて右が鳥、左が魚で、白木の臺に載せ、雉子は雄で、鯉は背を上にするのであります。

▼銚子 銚子は長柄を用ひるのが本式で、雌蝶を附けます。これは片口の場合ですが、兩口の場合は一方の口を紙で包んでおきます。そして根引の雄松二本と山橘の枝(一名やぶかうじ)三本を雄蝶と一緒に結びつけ、雄蝶の紙は金紙と赤紙とを重ねて折り

略式銚子



蝶

裏の赤が少し表の方へ出るやうにするのであります。また金紙の代りに白紙でも白紙のみでも宜しい水引は金水引五本で結びます。また銚子の柄は包まずに、月の數になぞらへて十二所巻くこともあります。

▼提子 提子は雄蝶を銀紙で、赤裏にして折ります。また白赤でも白紙ばかりでも宜しい。銀水引五

本で雄松一本に山橋二本を結び附けます。松も山橋も造花でよいのでそれに譲り葉をあしらふこともあります。

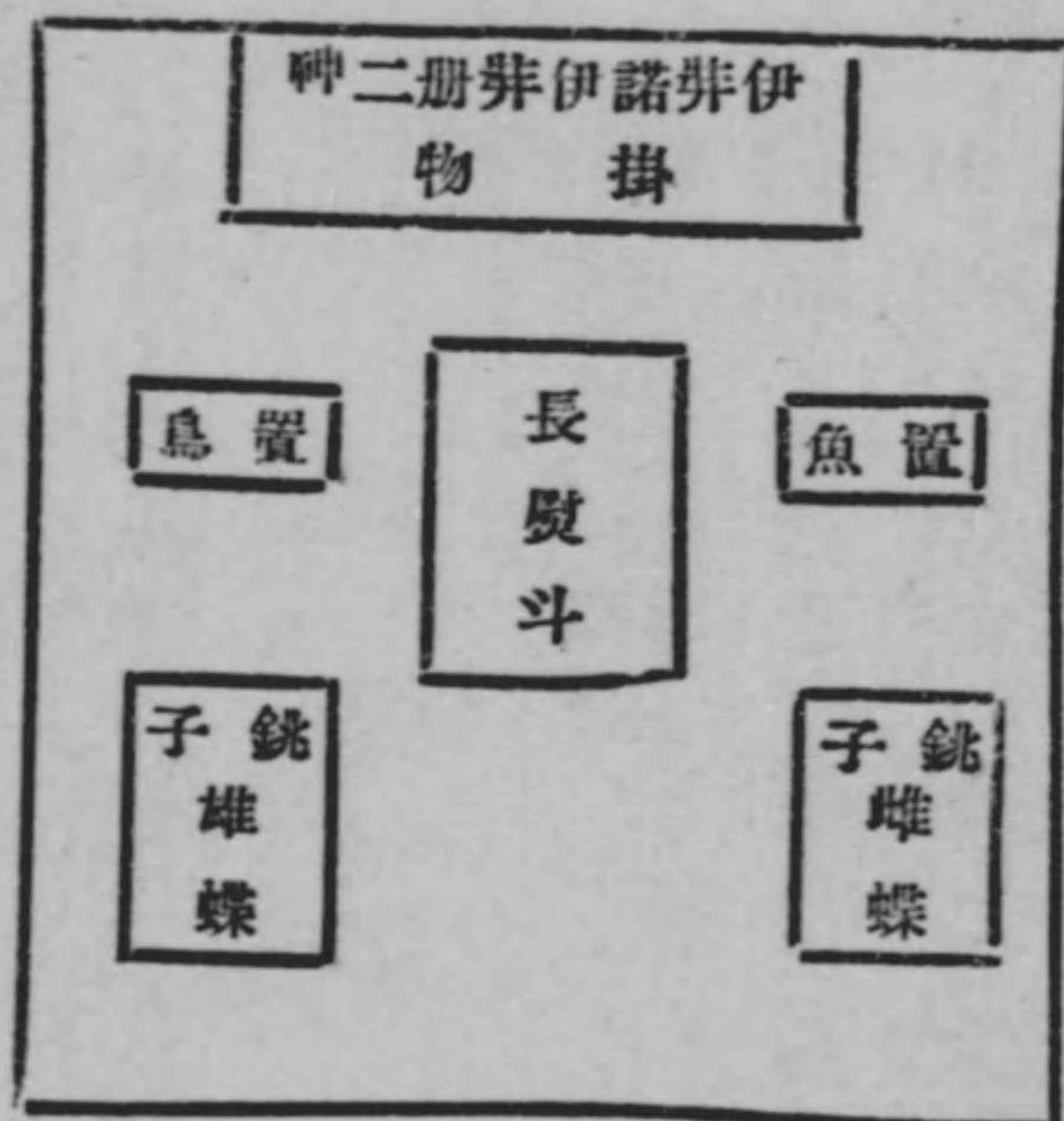
▲瓶子 瓶子の口の包み方は、菱形に包み、紙は矢張り金紅、若くは白紅、或は白と前の蝶花形と同じことで、水引も金水引五本で結び、その端を縁に縮ませます。

▼燭臺 古式による結婚の式場では、必ず蠟燭を點すものですが、式三献の席へ點す燭臺は、床の間の前左右へ一枝づゝ置き、饗膳の左の座に一枝、その次の下座の左右に一枝、大廣間なればこれに準じて幾枝もおきます。それに蠟燭の心を切らぬことで心が出来ましたら他の蠟燭を手燭に點して持ち出で、換へるやうにします。

式場の床飾

これは本式には神床を設けてやるのでありますが、略して實用的に一般に行はれてゐる床の飾りは、まづ床には白布を敷き、正面に伊弉諾伊弉冊の二神、若くは産土神を祭り、中央に白木の臺に四方衝重をおき、鏡餅一重に生松を一本立て、左右には蝶花形で口包みした御神酒の瓶子一對を置き、その左右に置鳥置鯉を供へます。式を舉

げるときには、その瓶子の御神酒を受けて銚子に入れてこれを戴いて盡結をするので



あります。故に床へ目出度い掛物、また立華、生花などを置き、肝腎の供物を床前に置いたりするのは間違であります。また此の床飾りを略式にして、床を飾らずに屏風のみを建てることもあります。

蓬萊山または松竹梅のやうな目出度いものでも宜いのであります。そして雌蝶雄蝶は床の間の狭いときには、別室に置きます。御神酒、長熨斗は角三方、置鳥置魚は長三方、雌蝶の銚子は三方を用ひません。銚子提子を飾つて置くには、銚子は左、提子は右にします。

### 三献の肴

三献の肴には、式三献と雑煮三献とがあります。式三献の肴は高位の方に用ひられるもので、普通の家では雑煮三献の肴を用ひるのであります。式三献の肴は本膳に引渡し、二の膳に打躬、三の膳に腸煎を盛ります、雑煮三献の肴は初献に熨斗鮑、昆布、勝栗、二献に雑煮、三献は鰯の吸物であります。これに用ふる熨斗鮑は長さを小角に盛れるくらゐに切り、幅が五分くらゐなれば三本、三分くらゐなれば五本を平紙立の中におき、昆布は青昆布でない菓子昆布を長さも幅も熨斗鮑の大ききくらゐにしてこれも平紙立の中に盛ります。勝栗は四隅に一箇づ、頭の尖つた方内に向け、中央に一つ、これは尖つた方を小角の綴目の方に向けて盛り、都合五つを矢張り紙の中へ飯糊で押附けておきます。雑煮は、熨斗餅、里芋、大根、申海鼠、申鮑等を用ひるかまたは熨斗餅、里芋、大根、青菜、花鰹等を入れ、汁はあつても無くてもよく、本式



には土器に盛るのですが、略して椀を用ひてもよいのであります。

次に吸物は小鯛の肉に鰭のついたものと、正味のところをおろして混ぜ合せ、鰭のこけぬ様に申などで支へて煮ます。何れも白木の三方を用ひ、箸を付けておきます。この三献の膳を撤くには、後より据ゑたものより順に撤き、先に据ゑたものは一番後で撤くこととなります、これが禮なのであります。

## 膳の進め方

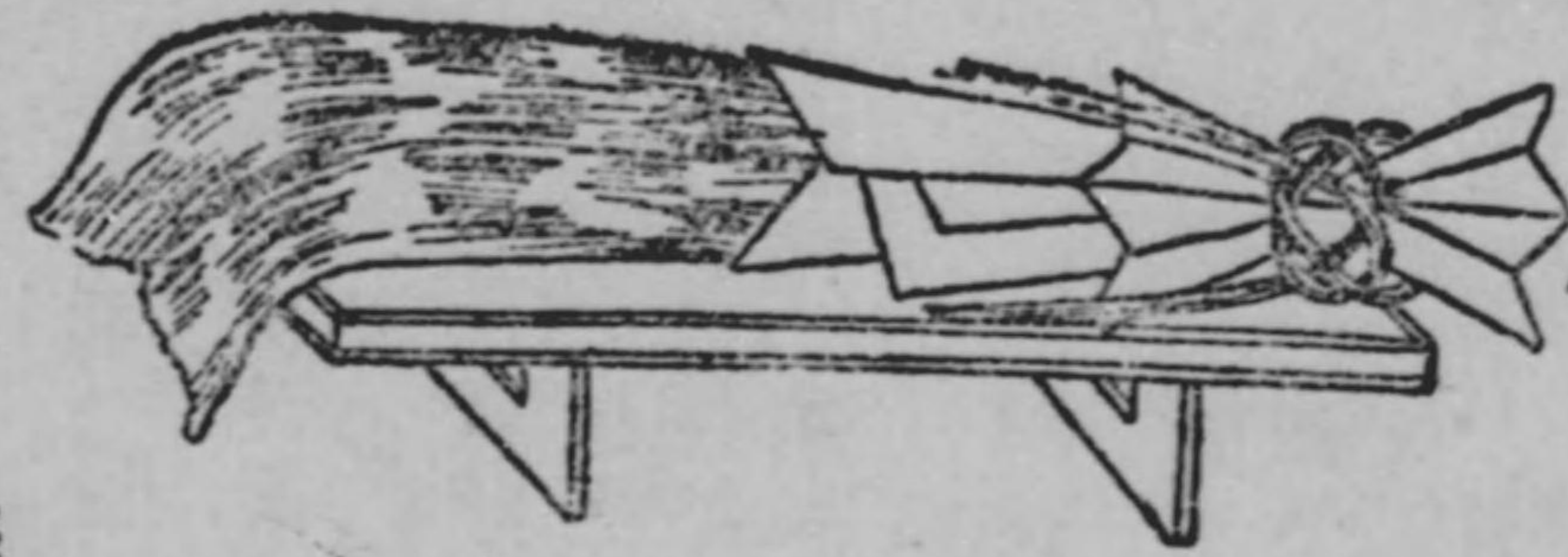
膳の据ゑ方も、本式では三方を用ひますが、略しても熨斗鮑はせひ三方を用ひることになつて居ります。三方の持ち方は、兩手で三方の脇を持ち、小指と薬名指は孔へ掛けて持つのが、古來よりの持ち方でありますが、當今は左の手を手前の孔へ掛けて持ち、右の手で右の縁を持ちます。これを薦めるには、三人の給仕が同時に持つて出て据ゑるのでありますが、少し間を置いて婿、嫁、待女郎と据ゑても宜しいのであり

ます。一人の給仕が三人へ三度に据ゑるといふ事はないのですが、然し人の無い時には止むを得ませんので、便宜の處置をとつても宜しい。この膳の据ゑ方には、眞行草の三段があります。けれども何れも引渡しの膳は、各自の前に据ゑます。眞は雜煮を引渡しの右に据ゑ、その右に鰭の吸物を据ゑ、右へ右へと据ゑるのであります。行は雜煮を引渡しの右に据ゑ、鰭の吸物を左にします。草は引渡しの左に雜煮を据ゑ、その左に鰭の吸物を据ゑるのであります。

## 長熨斗の薦め方

花婿が座に着きましたら長熨斗を薦めます。この長熨斗鮑を包んで薦めることは、近世の風俗で、首は衝重の中央に立て、その下に小さいのを盛つたもので、それを新郎新婦に挟んで薦めたものさうであります。で上々では衝重の三方または四方を用ひ、中より以下では塗三方に熨斗鮑をおいて薦めるのです。その薦め方は嫁、婿、待

女郎がそれく座に着いたときに雌蝶雄蝶を取り扱ふ酌人が、床の間から長熨斗を下座の中央に持ち来り、少し進めて一同が禮をします。また略して床の間に飾つた儘で



(長 熨 斗 匏)

禮をすることもありません。この時婿は言葉をかけることなく、待女郎が取繕つて「おめでたう」と言ふのであります。この薦め方は、當今の略した薦め方ではありますが、本式には夫婦の座が定まると、婿方の給仕が三方を包んだ方を人の左にし、頭の廣い方を人の左にして初めに新夫の前に据え、次に新婦の前に据え更に待女郎と別々に薦めたものであります。そしてこの長熨斗を薦める間は本酌人と加へ役とは次の間に下つて控へて居るのであります。

## 膳部のこと

新郎新婦の前に薦める膳部は、古式に依れば却々難かしいものでありますが、近頃行はれる膳部は

本膳——黑豆、花鰹、卷壽留女、白髮毘布、勝栗。

二の膳——青梅、結び毘布、數の子

三の膳——鯛の鰭(または蛤)の生。

尙ほ以上の膳部は略して本膳のみでも宜いのであります。膳は高足膳はまたは三方器は素焼の皿が本式ですが、略して赤白の紙を、直径三寸くらゐの梅の花形に切り、それを皿の代りに用ひても宜いのであります。箸包は別々にせず、略して本膳のみにし、肴も三種か五種にし、目出度いものなら何でも宜いのであります。然しそれは必ず一對を本膳とするのであります。

## 白無垢と庭火

女子は一旦嫁したら夫の家を以て我家とし、再び親の許へ歸らないといふ覺悟のあるべきは勿論であります。従つて婚禮の夜に嫁が生家の門を出るときには、門で火を焚いて送り出し、且つ嫁には白小袖を着せます。これは最早生家にては死んで、新たに夫の家へ生れるといふ意義を象つたものでありまして、白小袖の門火はいづれも死人を葬るの禮に用ひるものでありますから、斯く言ひならはしたものでありませう。この白小袖は祝儀の衣服でありまして、上々方では御裳束の下に召し給ふもので、諸の色に染らず、清淨無垢なることを表したものでありまして至つて目出度いものであります。葬禮の衣服は喪服と名づけて、練らない粗布を着ますので、白無垢とは全く別物であります。尙ほ嫁が婿の家に着する前に、婿の家では門内玄關先に、陰陽になぞらへて二つの火を焚き、嫁の來るのを待つたものであります。

## 花嫁迎へのこと

輿入の當日に嫁方より、輿入の時刻に先立つて、嫁の家に迎ひに行くものであります。この使者には一族の中でも重立つたものを使者に立てるのであります。それは昔婿自身が嫁を迎ひに行つた遺風からで、つまり婿の代理ですからであります。この使者を受けた嫁方では、使者を座敷に通して、熨斗鮑を三方に載せて出し、上輩ならば三献、中輩ならば酒肴、それ以下は茶菓子を出して饗應し、嫁方の父母親族の者が出て挨拶し、使者は嫁が里方を出る前に引取るものであります。

## 待女郎の心得

待女郎は待女房とも云ひ、これは婿方の勝手に通じ、そして花嫁に附添うて常に嫁を導き世話するための婦人で、相當の年輩で諸事に馴れ、殊に婚禮式一切の事を辨へた人を選ぶことが肝腎であります。

この待女郎は花嫁が到着しましたら、嫁を案内して休息の間へ入れ、そして萬事に

ついで嫁に注意するばかりでなく、婿方の一切の支度の注意をするは勿論、祝の室を更めるのも其の役でありまして、當日一番の大役であります。また嫁が祝の室へ入るときなども、待女郎が嫁の休息所へ行つて、嫁の支度が調ふたならば、誘つて祝の室へ案内し着座させるのであります。近頃ではこの待女郎を省いて、媒酌人の妻女が待女郎を兼ね、萬事の世話をするのが多く見受けられます。

## 門出の盃

嫁が其家を出るに先立つて、里出の祝宴や父母と別れの盃事をするものであります。この二席は元は別々に行つたものであります。當今は二席を同時に催すやうになりました。普通は式三献の盃事をするので、その座り方は、床の上座に父が座り、(たとひ實の親が無くても、既に結納も済ましたことですから假親がある譯です。その次に父方の親戚の婦人連が並び、床脇に母、次に嫁、その次に母方の親類の

婦人が並び、次の間の兩側には召使の者共など一統が残らず並んで、名残の盃を汲み交すのであります。このときは男の父のみであつて、他は皆婦人であります。

その盃事の順序は、まづ酌人が三方に熨斗を載せて持ち出で父の前に置きます。父が熨斗に手をかけると、酌人はその三方を坐順に持つてゆき、一座の人々が皆手をかけ終ると、熨斗を上座におきます。次に酌人は別室より三方に三つ組の土器を載せて左手に持ち、右手に銚子を持ち出で、父の前に跪き、三方をその前に置くと、父は盃を取りますから、酌人は三献つぎます。父はそれを飲んでその盃を右側におき、中の盃を取上げます。酌人はまた三献つぎ、父はこれを飲んで側においた盃の上重ねます。かくして次の第三の盃で再び三献飲み終ると、その盃を三方に載せ、その上に以前の二つの盃を重ねます。酌人はこれを嫁の前に持つて行き、三献注ぎますと、嫁は父のした通りに三献づゝ受けて飲み、その盃を父方の親類に献じます。その婦人も二人のした通りにします。酌人は次に三方と銚子とを持つて次の

間に退り、更に改めて持ち出で、今度は母の前に坐して三献づゝ前の通りにつき、母はこれを飲んで嫁に渡します。嫁は三献づゝ飲んで母方の親類に献します。かくて次に飲んで末座の婦人が盃を納め、それより次の室に列んだ召使の者までも盃を廻し、これで式が済むのであります。

右は銚子一つで注ぎますが、本式には長柄の銚子に注いで提子に加へるものであります。また略して銚子二つで行ふ場合もあります。然し近頃では簡略を旨とする風がありますから、初献に吸物、二献肴、三献肴で済ますのも宜しい、その吸物は何でも目出度い魚と野菜とで調べ、取肴は松葉鯛、結び昆布など用ひます。

### 嫁入の順序

兩親一族との門出の盃事も済んで、いよく時刻となれば門出となるのであります。この嫁入の行列は、昔時は輿に乗つて、その行列も物々しいものであります。

が當今は簡略になつて自動車、人力車などを用ふるやうになりました。然し古式の行列を心得ておく必要がありますので、一應述べておく事に致します。

今専ら世間で行はれてゐる行列の順序は、先頭に媒酌人の下僕が提灯を持つて行き次に媒酌人夫婦が進み、その次に嫁が進み(嫁は人力車に乗り、下婢が傍らに附添ふ)次に父母、親戚(略式なれば親戚の中より總代一人を選んで附いても宜い)の順で、各自下僕に提灯を持たせて附添はせるか、或は全部が人力車に乗つて、下僕の附添ひなど附けぬこともあります。また自動車か馬車を用ふる場合には、第一の車に右方に嫁、左方に媒酌人の妻が二人並んで前向きに乗り、その前に媒酌人の夫が後向きに乗ります。第二の車には嫁の兩親が後部に乗り、親戚が前部に乗ります。また人数の多いときには、この二車の後に親戚なり供人なりが附くこととなります。また媒酌人の夫の方が先に婿の家に行つてゐる場合の行列は、第一に媒酌人の妻、第二に嫁、第三に嫁の母、第四に嫁の父、第五に親戚といふ順序も行はれて居ります。尚ほ婿方への

土産物は、その日の夕方までに先方へ持たせてやつても宜いのですが、供人が土産物を携へて、この行列に加はつてもよいのであります。

それに古式によれば、婿方では嫁の来る時刻になれば、家の定紋の附いた提灯を持たせて、三町なり五町なり嫁の来るのを見させる遠見といふものを出したものであります。このものに行列の道程を通告する役目をさせ、且つ道筋を違へたり、行列の亂れぬやうにさしたものでありまして、殊に田舎に於ては必要なものであります。

### 花嫁到着時の心得

さて嫁が婿方に着きましたら、婿方では男媒酌人に、婿方を代表する格式の兄なり叔父なりと云つたものに、待女郎か介添女が出迎へて、嫁を控への室に導きます。こゝで暫らく休息の後衣裳を改めるもあり、また其儘衣紋を正し、服装を調べ、化粧を直しなどします。このとき、古式によれば介添の女は取急ぎ湯漬の飯を薦めるのが

本式ですが、大抵は白湯に菓子を出します。これから後は女媒酌人と待女郎とはいつも嫁から離れないやうにせねばなりません。そして靜かに準備の出来るのを待つのであります。

一方婿方では、花嫁が着いて萬事が整ひましたら、主なる者が儀式の座敷に行つて手落のないやう見廻り調べます。まづ神前の供物、床飾、座席などは特に氣をつけ、式場で直ぐ入用の物は便宜上床の前に揃へ、銚子、三献の肴、鳥臺、押臺などは次の室に並べておきます。

### 結 婚 式

式場の設備が整ひましたら、媒酌人の夫は婿を連れて式場に入り、婿を上座に坐らせします。少し下座に媒酌人の夫が坐り、同時に媒酌人の妻が花嫁を誘つて來ましたらば、待女郎はこれを迎へて嫁の手をとり、婿と向ひ合せになるやうに坐させます。そ

して自分はその次に坐し、媒酌人の妻はその夫とまた向ひ合せに坐ります。かうして座が定まりましたら、初めに長熨斗を薦めます。酌人は本酌と加への二人でよいのですが、酌人は瓶子の酒を提子に移し、銚子に加へ、元の通りにして次の室に控へてゐます。次に引渡しが出ますから、その時酌人は床より盃の三方を下して婿の前に据ゑ、銚子で三献注ぎます。婿がこれを飲めば右手に銚子を持ち、左手に三方を持つて嫁の前に行き、三献注ぎます。この間に媒酌人は小謠を謠ひます(蔭の謠にても宜し)嫁がそれを飲むと、その三方を媒酌人の前に持つて行き、媒酌人は上の盃を下の方へ廻します。この間に加へと本酌とが出會つて、銚子に酒を加へるやうにします。ここを見計つて打射か鱒の吸物を出します。本酌は三方と銚子を両手に持つて嫁の前に行き、三献注ぎます。この時媒酌人は再び小謠を謠ひます。そして婿が三献飲んだら三方を媒酌人の前に持つて行き、媒酌人はその盃を下に組替へ、一番大きい盃を上になります。その盃にまた酒を加へることは以前の通りです。こゝで腸煮か雑煮を

出します。その大きな盃で婿が三献飲んで、次に嫁が三献飲みます。このときに媒酌人が小謠を謠ひ、酌人が酌をすることは前と同じです。この盃が済むと媒酌人は盃を一番下に組替へますから、盃は最初の通りになります。そこで本酌は銚子三方を、加への者は提子を以前のやうに床に飾り、次の間に退り、正面に向つて一禮して式が終るのであります。

右の如く古式によつて式を挙げれば、この三々九度の次には、直に親子の盃、小姑との盃、または以上を同時にして親族盃をしてしまひます。それから色直しの盃事をするか、或は略して衣裳だけを更へて、總容の盃事、即ち披露の宴に出ることになります。

### 舅姑と嫁との盃

三々九度の盃が済みますと、只今では親類盃をして、舅、姑、兄弟、親類との

結び盃をしてしまひますが、古式によれば舅、姑への嫁見参といつて盃事あり、また小姑へも初見参の盃事があります。

舅盃は三々九度の盃が濟んで、嫁が少憩した後に、待女郎は嫁を案内して以前の式場へ來り、三々九度の盃をした通りに坐させます。そこへ介添は婿の兩親を案内して客位に坐らせ、嫁は主位に坐し、待女郎はその次に坐ります。そして初めに著初めの臺を出し、次に舅、姑、嫁の順に引渡しを据ゑます。それから雜煮も吸物もこの順に据ゑます。盃はまづ舅から始めて一献飲んで嫁にさし、嫁が一献飲むときに舅から引出物のあることもあり、また略して肴ばかり遣はすこともあります。そして次には別の盃で嫁が一献飲んで、これを舅に進めます。舅が一献飲むときに肴を薦めます。そこで舅は、もう一献飲んで納めます。姑との盃事もこれと同様であります。つまり目下が三献で、目下が二献です。この盃が濟むと漸次に料理が出て、肴は押臺に盛ります。式が濟めば舅、姑、嫁の順に立ちます。この席で嫁から舅姑へ

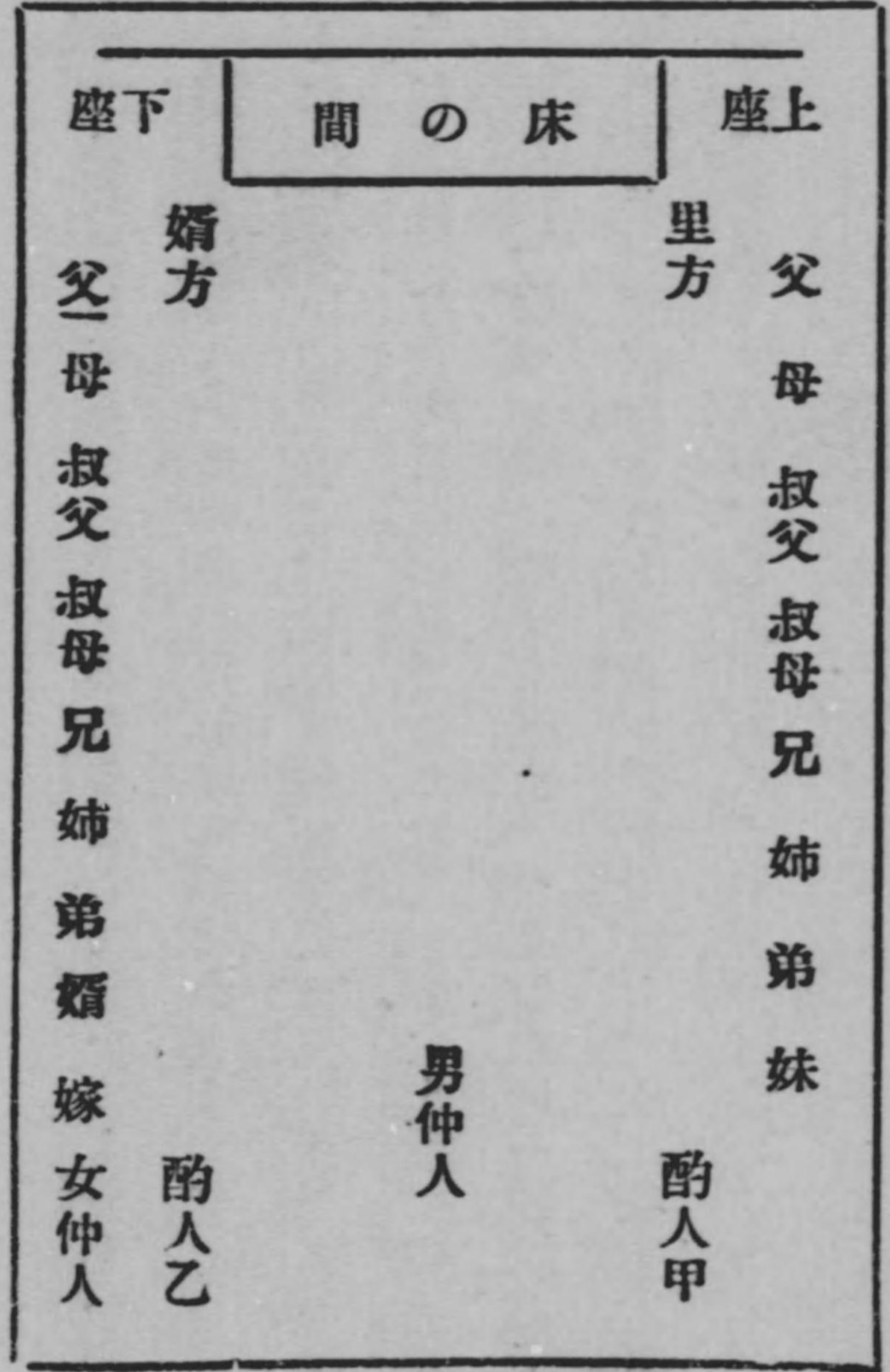
の土産を披露してもよし、その以前にして置いても宜しいのであります。尤も此時に舅、姑からは嫁へ一通りの挨拶をするのであります。

また小姑との盃事は、兄なり姉なりの目上の者であつたならば、嫁は主位に坐し弟なり妹なりの目下の者であつたら、嫁は客位に坐ります。そして盃をするには、双方へ一枚づゝ臺に載せて据ゑ、目上の方が一献飲んで、その盃を目下へさし目下の者が一献飲むと目上の者が肴を遣はし、次に目下の者が別の盃で一献飲んで三の盃を目上に薦め、目上の者はこれで一献飲むときに、目下の者より肴を薦めます。そして目上の者は、もう一献飲んで盃を納めるのであります。これも目下が三献、目下が二献、都合五献でありますから、家族の多少によつて心得てよいのであります。

### 親類盃の仕方



三々九度が済みましたら、多くの場合少憩の後引續いて親類盃をします。親類盃は里方を上座に据ゑ、婿の方は下座に坐ります。花嫁は婿方の方に坐り、嫁に附いて女の媒酌人が坐ります。座が定まりますと男の媒酌人は座敷の真中に出て、まづ嫁方へ婿方の紹介をします。「お父さんは某さんで、次はお母さんの某さん、次は



某さんでございます」と云ふやうに婿方の親類兄弟をみな紹介し、最後に婿さんの名前を披露して、「幾久しく御願ひいたします」と言つて挨拶します。嫁方の方も同様順次に紹介して、最後に

嫁の名前を紹介します。そして「幾久しく宜しく御願ひ申します」と言つて、それで紹介は済んだのであります。これから其の席に直ぐ盃臺運び出して、酌人は一番下座に控へて居ります。本式にすれば銘々順次に盃を廻すのでありますが、當今では總て略式に行はれて居ります。その方法は媒酌人が座敷の真中に出て、「今日はお盃を別々に頂きます筈を略しまして次盃に致します」と挨拶し、一つの盃を三方に載せたものを二つ拵へて、それを各上座に持つて行きます。そして酌人二人は同時に嫁方の父と婿方の父とに盃を献じて酒を注ぎます。それから圖の如く盃を一人づつ隣り隣りへ廻して、婿の方の盃の終りを嫁に、嫁の方の盃の終りを婿に持つてまゐります。この二つの盃を重ねて女媒酌人が預り、臺に載せますと、媒酌人は「幾久しく目出たく済みました」と挨拶をし、これで終るのであります。

色直しの事

色直しの盃事は、只今では多く行はないやうであります。故實だけを述べて置きます。この盃事は、三々九度の盃を終り親子の盃、小姑の盃をしてから親類盃をする時に、口へ紅をつけ、衣服を取換へてその席へ出るのであります。即ち三々九度の盃事ときは白であつたものを、この時赤とか空色とか云ふものにしてます。尚ほやかましく申さば、白の次には空色を着、それから赤になり、黄色になつて一番終りに黒になります。黒は止め色と云つて何時も變らぬ色と申します。然し、これはやかまし過ぎて到底も實行出来ませんから、白の次に空色を着、赤を着るのが普通であります。然し現今では初めから黒地を着ますし、そんなに衣服を作る必要もありませんので、色直しの必要もありませんが、強ひて色直しの盃事を申しますと次の通りであります。

色直しの盃事は、婚禮を擧げてから三日目に行ふのが本式であります。元來色直しといふのは、式の衣服を脱いで常の衣服に着替へ、床の飾り替へをして、總て色を

直して心から寛いで盃事をするのが趣意であります。本式なれば式をして三日間は婿も嫁も待女郎も、介添の女房達も皆式着のまゝの白い衣裳であります。三日目の朝になると即ち色直して白い式着を着替へて、常の色物の小袖になるのであります。そして座敷の飾りも更へるのですが、この色直しには、婿は嫁より贈つた小袖を、嫁は婿から贈つた小袖を着るのが本式であります。當今のやうに別に小袖を贈らない婚禮であれば、別に然ういふ必要もなく、たゞ然ういふ氣持で、それ〴〵身分に應じて行へばよいのであります。

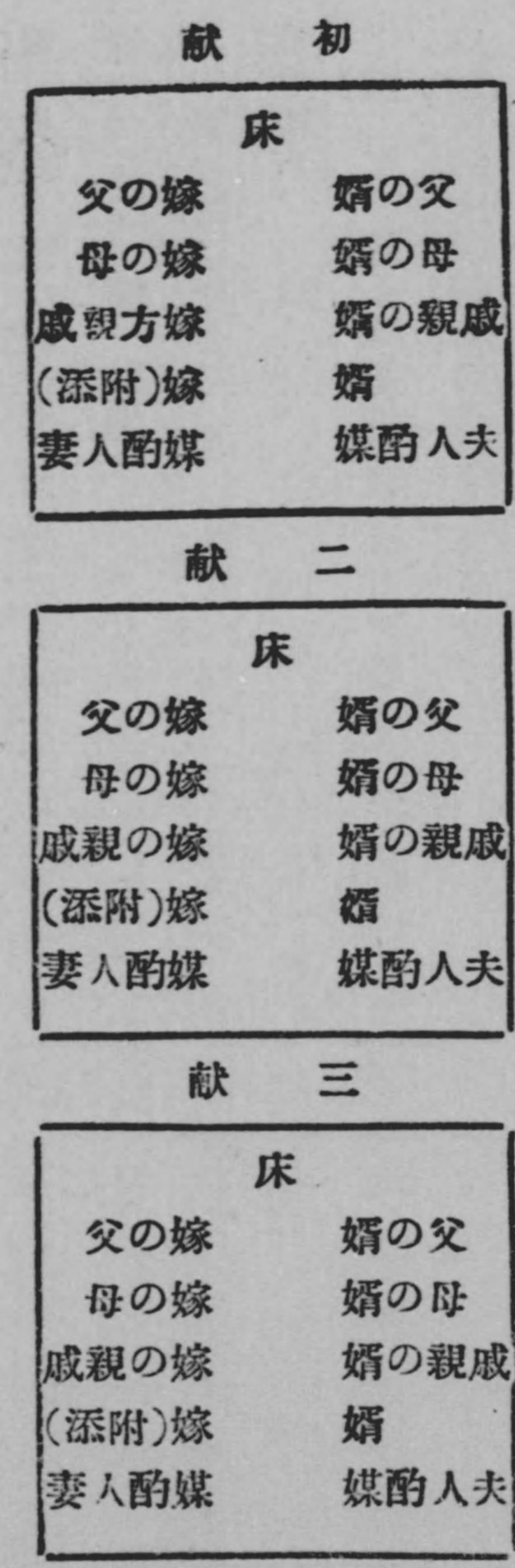
今一般に行はれる色直しの式を述べますと、式三献即ち三々九度の盃が済んで、皆が休息してゐる間に、床の間の供へ物を撤し、更に床の飾り更へをして、皆が着座するのであります。その席順は、客位の上席へ婿の父、次に婿の母、婿方の親戚または總代の者が坐り、次に婿、媒酌人と坐ります。また主位の方の上座には嫁の父、次に母、嫁方の親戚または總代の者、嫁、媒酌人の妻が坐ります。この時の服装は男子

は羽織袴、女子は白衿紋附丸帯で、本式には櫛出帽子を戴きます。座が定まると給仕の者は白木の足打臺の木具に、昆布と熨斗鮑とを相生結びにしたものを載せて持ち出で、婿の父、嫁の父、婿の母、嫁の母、婿の親戚、嫁の親戚、婿・嫁、媒酌人の夫、媒酌人の妻と順次に進めて、次の室に退つて一禮します。續いて酌人二人も次の室へ出て一禮して徐々と床前に進み、三土器を載せてある三方と、雄蝶の附いた銚子とを持ち、加への者は雌蝶の提子を持つて起ち、兩人とも次の室へ退り、雌蝶の酒を三度加へます。そして本酌は雄蝶の銚子と三方を持ち、婿の父の前に行つて酌をします。加への者は次の室に控へてゐます。この時も無言で、冷酒の盃事をし、結びの盃は次に述べるやうに媒酌人で納めます。(この時陰で小謠を謠ふ)この式が済めば本酌は三方と銚子を持ち、加への者は提子を元の如く床へ直して、次の室へ退つて一禮します。それから一同は座を起つて休息所に行くのであります。

### 總客の盃事

この式は婚禮の夜でも、また翌日でも婿方が親類を招き、また嫁方の兩親兄弟等を招いて祝宴を開くので、本式にはありませんが、これは婿入も里開きも同時に片附けるといふ至極簡便な方法であります。

この行り方は、前述の色直しの盃事が済んで一同が休息の間に座敷を直し、座蒲



團、火鉢、煙草盆を出して賀宴を催すのであります。席順は床の右側に婿の父、母、婿方の親類、婿、媒酌人の夫、左側に嫁の父母、嫁方親類、嫁、その後、に附添、媒酌人の妻の順に坐し、盃の順序は圖で示す通りで、初献は婿の父から始めて媒酌人の妻で納め、二献は嫁の父から始めて媒酌人の夫で納め、三献は嫁の父から始めて嫁まで流して、嫁より婿の父にさし、婿の父から順にまた婿まで流して媒酌人の妻にさし媒酌人の夫で納めるのであります。

この式が済みますと、媒酌人の夫を上座へ直らせ、媒酌人の妻を嫁の母の次へ坐らせ、嫁は末座に直ります。そして座が定まりましたら、双方の父と父とを初め各自初対面の挨拶をして祝言を述べれば、給仕は煎茶や菓子を薦め、雑煮を出し、次に鯛の吸物を出し、その吸物や雑煮の膳と引換へに、酌人は朱塗蒔繪の三つ盃を花月臺に据ゑ、燗鍋に燗酒を入れて持ち出で、肴も出て酒宴が始まるのであります。そして盃が一巡した頃、婿の父は、婿の兄弟姉妹を座敷へ呼び、嫁の父母及び親類の者か

ら嫁にも対面させて祝言を述べさせるのであります。

この祝言の途中で婿と嫁とは双方の父母の許可を受けて寢室に入るのであります。

この時は双方の母、待女郎、媒酌人の妻も起つて嫁に附添つて行き、そこで婿と嫁とは盃をするのであります。また座敷にある人には、酒宴が終ると本膳を出します

(注意) この總客の盃事は、謂はゞ當今の披露の宴でありまして、都會などでは多く割烹店などで行はれます。

### 閨盃の式

總客の酒宴の途中で、婿は待女郎に案内されて嫁の部屋へまわります。この前に介添女は、新夫婦の寢床をとつて置きます。この寢具は婿の分も嫁が持参するのであります。若しさうでない場合には、婿の家のを用ひます。寢床のとりやうは、東枕にして、男は南に、女は北の方に臥すのを法則とします。いづれにせよ男は上座に、

女は下座になるやうに寢床をとるやうにするのであります。

盃事は、夫婦の前に巻錫を載せた三方と盃一個を載せた三方と銚子を出し、冷酒で献々の盃事をするのであります。この時の酌人は女中がするのですけれども、待女郎でも媒酌人の妻がしても宜いのであります。

盃の仕方は、婿が一献飲んで嫁にさし、嫁は受けて飲み、これを婿にさし、婿はまた一献飲んで盃を納めます。そこで酌人は退り、待女郎は夫婦を寢床に導きます。この際婿は氣を利かして手水に立つやうにします。その間に嫁を先に臥せられます。若しまた婿が其の儘其處に居るやうでしたら、附添の者は場合を計つて寢られるやうに勧めます。いづれにせよ嫁の方は婿より先に寢るのが法ですが、場合によつては婿が先になつても構ひません。嫁の介添女は次の間で臥せるのであります。

## 閨房の構造に就て

普通に寢室と云ひましても、日本の殊に都會などの人家稠密な地にあつて、對外諸理由の許に特殊な部屋を區劃することは不可能なことであります。皆の大部分は食堂茶の間座敷寢室などの何れかを兼ねてゐるのであります。決して寢室など、取立ててあるべきではありません。これが地理的に廣大な田舎地方へ行きますと、小間が數多くある關係上、かうした場合には困らないのであります。先づ都會地にあつては以上の理由上、二階建家屋の二階の一間が恰好であります。さもなくば平家建にあつては紙襖などの薄弱な仕切りの部屋に隣つたところではなくて、相當な壁で遮斷した隣の室が適當であります。つまり音響を成るべく避けた場所にしたいたいものであります。これは新郎新婦が精神的に、たとへ些少たりとも障害を與へぬためであります。田舎地方にあつては成るべく母屋と接して居らぬ、たとへ近接して居るとも嚴重な遮斷のある場所と定め、または母屋を離れた別箇の座敷が恰好であります。また近時流行する文化式家屋であるならば大抵寢室が具備されてゐますから、これに住するならば

最適でありませう。

## 房の廣狹

さて次に寢室の内部廣狹に就て申しますと、あまり廣過ぎるのは肝要なる相互の精神散漫を惹起する憂ひがあります。又さりとて餘りにこぢんまりした二疊乃至三疊はすべてに手狭を覚え窮屈で萬事思ふに任せぬ嫌ひがあります。故に室の廣狹は最初に當つて注意が肝要であります。田舎では三疊などの小間は無いでありませうし、爲めに廣過ぎる嫌ひに陥らぬやうに屏風など用意すれば、一層理的想であらうと思ひます。

## 燈火

内部構造について閨房の照明も肝要な注意事項であります。人に依つて照明光線の煌々たるを好むでありませうし、又全くの暗黒乃至薄明等、各自それ／＼の好みもありませう。然し、あまり煌々たる燈火は考へものであらうと思ひます。又その反對に全く暗黒にあつては、徒に感受性鋭敏な新婦をして、極度の恐怖を起さしむる原因となりはしないかと懸念するのであります。茲に於て最も理想的な薄明、即ち燈火を一定の程度に光線を弱めた照明か、又は絹の緑、紅、青等の電球蔽ひを用ひ、部屋内をして軟き光線を充滿せしめ、視神經を刺激せざる程度の照明にすることを何より心掛けねばなりません。視神經はその薄明光線に對すれば、最も夢幻的印象を網膜に滞在させる性質のものでありますから青、緑等の薄光が最も適當と信じます。

## 溫度

室内の溫度、これも高度または低度の激しきに陥らざるやう注意が肝要であります。常に適當な皮膚を刺戟せぬ程度の度合を保持し、また出來得るならば冬季にあつては春期の溫暖を希望したのであります。この溫度も觸感に影響すること甚大であります。

す。

## 具備すべき藥品

室内具備品は、是非備へて置きたいものであります。それは二三の藥種微温湯並びにその容器、イルリガートル等、當夜備付けの必需品として挙げたいのであります。その他夜具類の極彩色、綿類の硬さ、四圍の壁の華麗等避くべきであります。

## 結婚披露

日本式の披露宴 結婚の披露は主な親戚と知人とを招いて爲すべきものであります。普通の日本式の披露宴と申しますと、近頃では多く料理店に案内して宴を開くやうであります。

で客を迎へますときには、婿方の親族の者なり、兄弟などが玄關に出迎へ、皆なが

揃ふまでの徒然に控室に案内して、茶や菓子を供します。そして時刻になつて人数が揃ひましたら、式場に案内します。式場の床の間には、蓬萊山だとか壽老人だとかの目出度い掛物をかけ、松竹梅とか鶴龜とか鯉の置物などおきます。

本来ならば嫁は婿方の一番終りに席に着く筈ですけれども、餘り隅の方では嫁に會はれなかつたりする者も出ますので、然ういふ時には男の媒酌人に伴はれて座席の中央に出て、客に一禮し、それから媒酌人から一同に斷つて嫁を中央に据ゑるといふ席次もよい方法であります。日本式の披露宴では、最初に媒酌人が立つて新郎新婦を紹介し、今後の指導、援助を乞ふ行き方も行はれるやうであります。この挨拶があつてからお頭附きの魚を供へた膳に向ひ、順次馳走の出るにつれて盃の献酬が行はれるのであります。そして終りに其の馳走を折詰めにして土産に差上げるので、それは菓子だとか風呂敷のやうな記念品を添へます。

西洋式の披露宴 西洋式ですと、新郎新婦は媒酌人に伴はれて控室の入口に立ち、そ

ここで先づお客様に、一々媒酌人から紹介されます。宴席では勿論中央に座を占め、その両側に媒酌人夫妻が付き、それから婿方には婿の両親、親族、兄弟、嫁方には嫁の両親、親類、兄弟などが座を占め、新郎新婦の前には主なる客が座をとります。一同着席しますと、主人側から一應の挨拶があり、直に御馳走になり、デザートコースに入つて、媒酌人が立ち、改めて新郎新婦を紹介しながら將來の厚誼を願ひます。それに対して主賓から答詞があり、新郎新婦の人柄を賞讃したり、激励したりして乾盃を行います。両家の萬歳を唱するのが通例であります。西洋式では別に土産物は用ひませんけれども、自分のテーブルに配られた献立表と、飾り花とは、歸るときに持ち歸るのであります。

尚ほ斯る正式の披露の宴を廢して、茶と菓子くらゐで簡單に披露し、成るべく多勢の知己朋友を招待するもよし、或はまた手紙なり葉書なりで廣く披露することも、徒らに費用を多くして見栄を飾るよりは、意義ある披露の方法であらうと思ひます。

### 結婚披露通知状

結婚の通知状は、丁寧にすれば二つ折の洋紙に、鶴龜とか松竹梅のやうな目出度い模様を色刷りするとか、または押出しにし、上部に家の定紋を同様に入れたものを用ひます。然し、多くは端書判より少し大きい分厚の、四隅の丸味を帯びた金縁の用紙を用ひます。文句は、候文も口語文も用ひますが、儀式的のもので、候文が良しいでせう。そして花婿、花嫁の両親の名を以て差出すのであります。封筒は白の角封筒で、表には宛名を書きますが、裏には差出人の住所姓名も書かずに差出すのであります。

墨色は薄いのは最も忌まれますから、成るべく濃い墨で書くやうにします。

謹啓 秋冷の候益々御多祥賀し奉り候。陳者今般内海鯛藏殿並に令夫人の御媒酌に依り花輪榮三殿長女由利子殿と私共長男初雄と婚儀相整ひ候に付御披露旁



々將來の御厚誼を願ひ候ため粗餐差上げたく候間來九月九日(土曜日)午後六時  
 日比谷〇〇亭へ御來臨被成下候はば光榮の至りに存じ奉り候右御案内まで如此  
 に御座候 敬具

年月日

里見 基次

同 翠子

何 某 殿

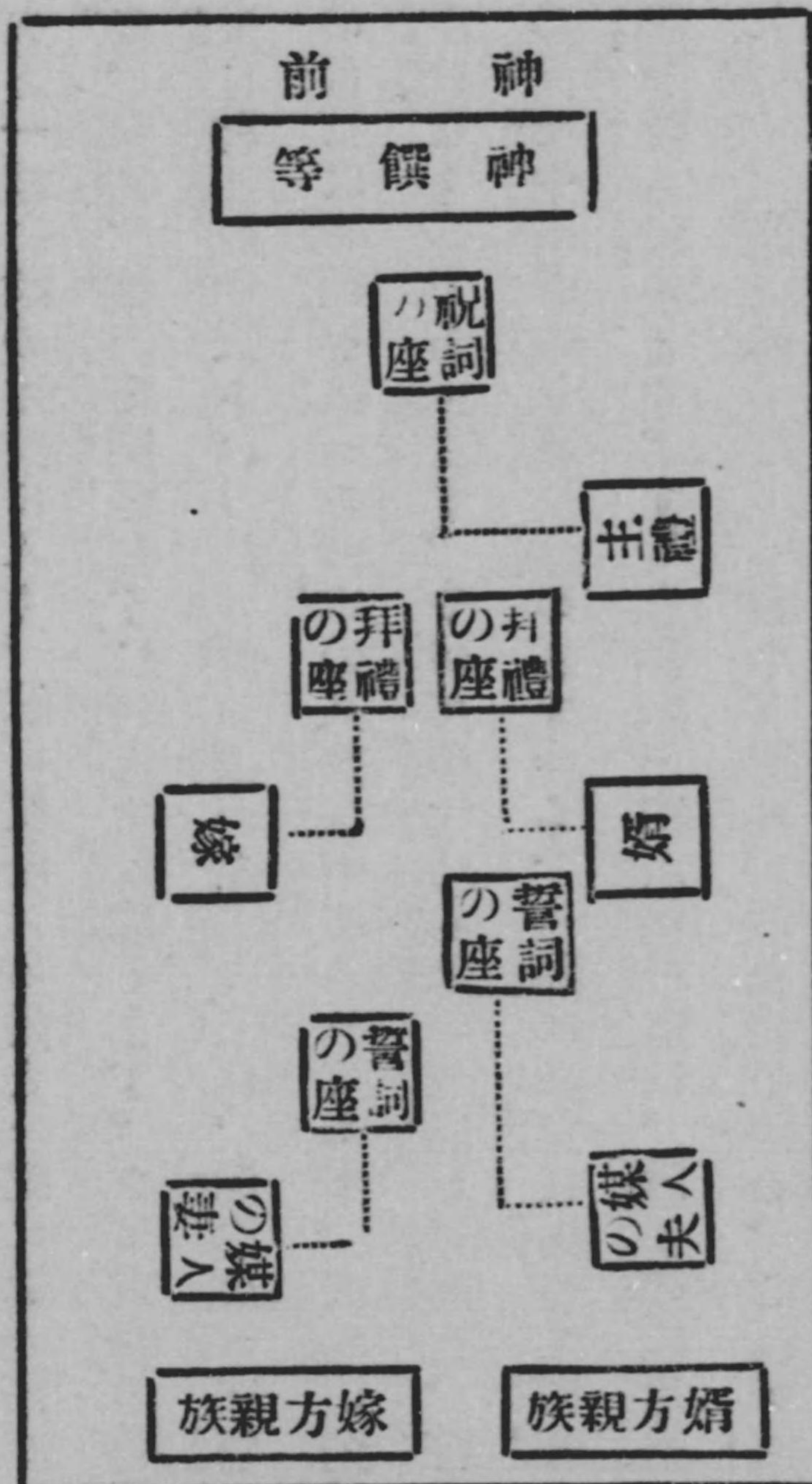
追而乍御手数數御來否九月五日迄に御一報相煩し度願上候

### 神前の結婚式

神前の結婚式は、日比谷の大神宮で神宮奉齋會が一般の結婚式を取扱つたのが初め  
 でありましたが、今は何處の産土神でも、社務所に依頼すれば舉式の出来るやうにな

つて居ります。

これは前以て結婚式を擧げる月日と時刻を通知して置けば、神社で準備してをりま  
 すから、その日になつて嫁方婿方とも社務所に行けば宜いのであります。その順序を  
 申しますと、婿方と嫁方とは別々の控室に入れ、時刻が來ますと一人の神官が控室に



來り、婿方一同と  
 媒酌人の夫を伴う  
 て式場へ案内しま  
 す。次に他の神官  
 が來て、嫁方一同  
 と媒酌人の妻を式  
 場へ案内します。  
 として婿は媒酌人

の夫と一緒に婿の控所に入り、嫁は媒酌人の妻と一緒に嫁の控所に入ります。双方の父母、親族、知友等圓の如くに列んで着席します。さて式場の模様はと申しますと、中央に神鏡が安置され、錦の御戸張が左右に垂れ、御簾が半ば巻上げられてゐます。その前には神饌を供へる白木の八足臺が置かれてあり、式場の光景は如何にも神々しく莊嚴なものであります。やがて齋主は衣冠の禮服を着用し、幣と玉串とを持ち、双方の父母や親戚等を祓ひ淨めますから、一同は神前に向つて禮拜します。伶人は笙、筆樂を奏し始めます。すると他の三四名の神官は、神前の八足臺へ神饌を供します。また齋主は婿と嫁の控所へ行つて新郎新婦を祓ひ淨め、これが済みますと社務所より介添人（婿には男嫁には女）が付き、兩人を神前に誘ひ、靜かに席に着いて正式に拜禮をします。齋主は神前に進んで、恭しく禮拜をして、懷中より結婚式の祝詞を出して嚴かに奉讀します。

齋主の祝詞が済みますと、今度は媒酌人夫婦が神前に進んで誓詞を讀上げます。

### 誓 詞

昭和何年何月何日吉日ト定メ婚姻ノ式ヲ行フトシテ齋ヒマツル大神等ノ御前ニ於テ何某ト何ノ某娘某ト夫婦ノ契ヲ結ビ堅ムルハ尊キ神ノ御心ニ依レル事ト祝ヒマツリテ今日ヨリ後ハ千代ニ八千代ニ相隨ビ相親ミツ苟且ニモ夫妻ノ道ニ背クコトナク互ニ輔翼シテ家政ヲ盛ヘ子孫ノ繁榮ヲ計ルベキコトヲ誓ヒ奉ル茲ニ兩人ニ代リテ  
媒 何某謹ミテマチヌ

昭和 年 月 日

(注意) 婿入の場合には「何某娘某、何某を迎へて」と記載せらるべし。父故人なるときは記載を要せず。官位勳功爵位學位ある方は記載せらるべし。

この誓詞は媒酌人の依頼に依つて齋主が朗讀することもあります。これが済みますと、三々九度の式になります。紅白の振袖に緋の袴をつけ、縁の頭髪を長く垂れ、根元を白い丈長で結び、末を紅白の紙で包み、紅白の水引をかけた、二名の端麗な少女が、一人は長柄の銚子を、一人は加への提子を持つて靜かに出で來り、神前に到りますると齋主は供へてある瓶子の神酒を提子にうつし、また銚子に加へて渡すと、少女

達は一旦これを次の室におき、更に白木の臺に昆布、勝栗、鯛等を盛つたものを一個づつ持ち出で、婿と嫁との前に据ゑ、次に一人は三つ土器の三方を持ち、一人は長柄の銚子を持つて出で、婿の方に行つて一禮します、婿は上の盃を取りますと、少女は一杯を三献に注ぎます。婿は飲んで盃をおくと、一人の少女は三方を捧げて嫁の前に行き一禮します。嫁は盃をとると同じ様に注ぎます。嫁が盃を置くと、その少女は、上の盃を下に組替へます。第二の盃で嫁にいま一度薦め、嫁が飲めば今度は婿に渡します。婿が飲んで下に置くと、また盃を組替へて第三の盃を上にします。それを婿が飲んで嫁が飲み納めます。少女は盃を元の通りに組直して、三方銚子とを持つて退り、これで三々九度の盃事が済むのであります。それより婿と嫁は媒酌人に導かれて神前の禮拜所へ進んで禮拜し、共に控所へ退きます。

この式が済みますと直に媒酌人及び親族の盃事があり新郎新婦が一旦控所へ退つた間に、今までの席は更まつて婿方は右側に一列に並び、嫁方は左側に一列に並んで

相對するやうに着席します。媒酌人夫妻は中央の正面に着座します。すると以前の少女は盃と肴を載せた白木の臺を持つて出で、婿方の父から盃を薦めて順々に酌をして廻ります。また一人は同時に嫁方の父から順々に酌をして、終りにこの



二人の少女は同時に起つて媒酌人夫妻に酌をします。そこで媒酌人は一同に向つて、目出度く式が了つたことの祝辭を述べて、こゝに結盃をするのであります。この式の初めから終りまでは約一時間くらゐで済みます。

この神前結婚なり、或は他の便宜な方法による結婚式には、閨盃などの式は行はないのであります。

## 教會の結婚式

教會で行はれる基督教式の結婚式は、新教と舊教とによつて擧式の次第が少し異なりますが、一概に言へば舊教の方が新教よりも儀式が面倒なやうであります。新教の教會で行はれる擧式の次第は、新夫婦、両親、親戚、友人、知己等が教會に行き、それ／＼定めの席に着きますと、第一に讚美歌、次にお祈りをします。それから今迄控室に在つた新郎新婦は、お祈りが済むと控室から式場に来り、入口で兩人は手をとつて聖壇の方に静かに歩んでまゐります。この時親戚知己の子供達は、兩側から美しい切り花を投げます。新郎新婦はその間を通つて最前列に位置しますと、司會者は兩人のそれ／＼の結婚の指輪をとつて兩人に簪め、その交換を終ります。それが終ると司會者は新夫婦兩人に對して誓ひをたてさせます。即ち兩人に互に相親愛する精神がいつまでも變らないといふことを、神に誓約させるのであります。この誓約が

了りますと、參列者の祝辭なり祝電なりを披露し、それが済むと司會者のお祈りがあり、讚美歌をうたつて式を了るのであります。式は極めて嚴肅の中に行はれ、それから記念の寫眞等を撮影することもあり、更に披露會に列席するとか、新婚旅行に出掛けるといふ順序になります。

## 結婚式後の心得

### 婚禮の翌日

婚禮の翌日には先づ第一に風呂をたて、新夫婦を浴みさせます。それから料理は普通で宜しいが本膳を出し、新夫婦並んで食事をさせるのであります。それから嫁の附添女が主となり、婿方の者も手傳つて嫁の荷物道具を整理して嫁の部屋を飾ります。尙ほこの朝になりますと、嫁の里方から部屋見舞として酒肴を贈ります。これは見舞として、嫁のところに来る客を待遇するための準備であります。